
貧乏騎士クロード

曾口十土

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貧乏騎士クロード

【Nコード】

N0116J

【作者名】

曾口十土

【あらすじ】

主君なし、金なし、おまけに馬も鎧も持たない貧乏騎士クロード。遠征から故郷に戻る旅の途中で、彼は旅芸人の一座に出会う。なかでも見目麗しい舞踏女に心を惹かれ、なんとなく後を追うようにして旅を続けるのだが――。

魔法も魔物も出てこない、中世ヨーロッパをモデルにした地味めのファンタジー小説です。

1・二レの大樹

「おい、あんた」

しけた田舎町を出て三十分ほど街道を歩いたところで、クロードはようやくその男を呼び止めた。

振り返った貧相な男にさりげなくクロードは近寄る。ほんの少し無精髭を生やした顔に愛想笑いを浮かべながら、なるべく男を警戒させないように、道でも聞くような何気ない態度で、しかしクロードは短く言葉を放った。

「さっきの町の通りでスった財布出せよ」

驚愕した男は返答をしない。かわりに懷の短剣を引き抜いて一閃させた。クロードは上体を引いて、顔面を襲った凶刃をわずかにそらす。

一転、男は身を翻して駆け出した。他に見る者もない田舎街道のと真ん中だ、逃げるに如かずと考えたのだろう。言い訳もせずに逃げの一手とは小悪党ぶりも堂に入ったものだ、とクロードは妙なところで感心していた。

感じ入りながらも、クロードは手頃な石を拾い上げると、狙いを定めて投げ抜いた。後ろを見る余裕も無く一目散に走っていた男は、いきなり脾腹に打撃を受けて、こらえきれず道端に横転した。

クロードは倒れた男にゆっくりと近づく。

「おっさん、この稼業が長いんだろ。宿屋の二階から眺めてたけど、あんたのスリの技、鮮やかだったねえ、惚れ惚れしたよ」

歩きたびにねずみ色の垢抜けしない外套が揺れる。うめきながら男が振り向いた。あばらに手を当てて、苦しそくに口を動かす。

「おまえ、おれを役人に突き出すつもりか」

「役人が賞金くれるっていうんならそうするけど、たぶん引き渡したところで『ご苦労さん』つってパン一個くれるだけだろ。貧乏な冒険騎士の当方としては、なるべく実入りがデカイ道を選びたいん

だ」

冒険騎士ねえ。自分で言い出した言葉ながら、これほど怪しげな身分もないな、とクロードは思う。「^{けわ}険しきを^{おか}冒す」とは言うものの、だいたいどんな人間でも生まれ育った町なり村なりの柵を踏み出せば、それなりの危険が待っているものだ。それを敢えて「今自分は冒険している」などと口に出すなど、苦笑の種でしかない。

それに騎士といっても、クロードには仕えるべき主君もない。そもそも馬も持っていない。剣の腕は人後に落ちない自信はあるものの、鎧も備えていない。限りなく自称に近い騎士だった。ちなみに戦さと呼ばれた時は、敵兵から甲冑を頂戴することになっている。必要があれば馬も。今年二十歳になったクロードは、いままで数度の戦場をそうやってぐり抜けてきた。

いつそ傭兵と名乗った方がすつきりするかもしれない。だが、クロードは小身ながら騎士の家系の出だった。自分をただの傭兵と定めるには、クロードはまだ若い。

「財布を持ち主に返すんだよ。お礼に一割二割くらいは固いだろ。もういいだろ、大人しく出せ」

クロードは腰に帯びたサラセン風の湾曲刀をちらつかせる。昨年、どこぞの田舎諸侯が率いる十字軍にひっついていったときに、敵兵から奪ったものだ。刀身の独特の反りが手に馴染み、以来愛用している。

「ま、待て。取引しよう、三割はくれてやる。だから見逃してくれ」

「おいおい、ふざけんなよ。おれはこれでも幾多の戦場をぐり抜けて、名のある戦士を刈り倒した騎士だぜ」

クロードは不機嫌そうに栗色の髪をかき上げた。

「そんな安い取引はないだろ。五割だ。それ以下だったらおまえの首を刎ねて、財布の持ち主と交渉する」

男の顔が一気に青くなり、うなだれた。

「たく、手こずらせやがって。こつちには予定があるってのに」
クロードが不景気にぶつぶつ言う。言いながらも彼は、ある期待に突き動かされて街道を急いでいた。

道沿いに白樺の葉が燃えるように鮮やかな黄色の列を作っている。道行く旅人の目を一瞬奪うほどの景色だ。だがクロードは紅葉なんぞには目もくれずに足を速めた。

懷に手を入れて、さきほどはねた盗賊の上前を確かめる。財布の持ち主はけっこうな富裕商人だったらしく、たくさんの銀貨と夜空の星のように輝く金貨が数枚。なかなか結構な取り分だ。しばらくは路銀に困ることはなさそうだった。

クロードが満足げにほほ笑んだとき、曇天の空からぽつりと一滴落ちてきた。振り返ると街道の後ろの方は雲が厚く、白い薄幕を下ろしたように煙っていた。

そのうちに白樺の葉を打つ雨音がざらざらと響き始めた。大粒の雨がねずみ色の外套も叩く。クロードは外套のフードをかぶって走った。街道の先に小さくニレの樹が見える。あの木陰に入れば、とりあえずは雨をしのげそうだった。

時ならぬ雨にぬかるみ始めた道をクロードは一目散に駆けた。ようやくニレの樹までたどり着いてみると、思ったより枝振りの大きな、それは大樹だった。木陰に入り、やれやれと顔上げたクロードはそこで立ちすくんでしまった。やや妄想めいた彼の期待が的中していたのだ。

旅芸人の一座がそこで休んでいた。

外套から滴を垂らしていたクロードに気づくと、若い舞踏女がさつと立ち上がってニレの根元に近い場所を空けた。クロードは常の放埒さはどこへやら、ろくに口も聞けずに頭をちよつと下げるだけだ。剣帯にぶつきらばうに落し差しにした湾曲刀を鞘ごと右手に抜き取ってクロードが座り込むと、今度は舞踏女が手拭いを渡した。

「……どうも」とだけ言って、クロードはびしょ濡れになっていた顔のあたりを拭いた。

舞踏女はまだ十七、八に見えた。太陽の一滴のような明るい金髪を宮廷の貴族夫人のように複雑に編み上げている。小さな顔には伏せ目がちな青く澄んだ瞳。エニシダの花を透かしたような控えめな唇は、クロードを見てかすかに笑んでいる。彼女の可憐な美しさ比べれば、白樺並木の紅葉などただの黄色い幕だ。クロードはそう思いながら、顔に当てた手拭い越しに改めて舞踏女を見た。

旅芸人の一座は彼女を含めて四人、一座を取り仕切っているらしい四十がらみの女に二十歳前後の女二人が、身を寄せ合つて驟雨をやり過ごしていた。

簡単な謝辞をつぶやいて、クロードは隣に座る舞踏女に手拭いを返した。

クロードはこれまでに二度、この舞踏女を見ている。二日前、田舎町の城門の列で前後になり軽く会釈を交わした。一目見て清冽な彼女の姿に、クロードは忘れがたい印象を受けた。二度目は昨日の昼のこと、田舎町の中央広場で賑やかに芸を披露していた一座を、宿屋の二階部屋から窓枠に頬杖をついて眺めていた。舞踏装束に身を包み、弦楽の伴奏と鼓に合わせて艶やかに踊る姿はクロードの脳裏に焼きついた。芸が終わると荷物をまとめて北門の方へ向かつて行つた一座を見て、もしか自分と同じく北部へ向かう旅か、とクロードは期待を膨らませていた。

「旦那、外套がずぶ濡れじゃないですか。こっちに來て火に当たってくださいよ」

声をかけたのは、二十四、五の行商人の男だった。彼も緑色の上着が濡れそぼつていて、樹の裏側で火を焚いているらしい。

さあどうぞこちらへ、と行商人がやけに丁寧に誘うので、クロードは名残惜しげに舞踏女の隣の席を空けた。外套は雨にしつとりと濡れ、冷気が骨まで染みていたので、行商人の申し出はありがたかった。

冷たい雨が過ぎ去ると秋も中頃を迎える。雪がちらつく前には旅を終えて北部地方に入りたかった。あの舞踏女の一団も、おそらく

大市で賑わう北部で一稼ぎするつもりなのだろうか。クロードは燃え上がる焚き火にあたりつつ、そんなことを考えた。

「旦那はどちらの騎士なので？」

いかにも商人といった物言いで、クロードの素性を探ってくる。

「どちらもちらもないさ。呼ばればどの旗の下にでも立つ。なにせ懐がさみしい冒険騎士なんぞでな」

「ほう、冒険とはロマンにあふれていいじゃないですか。日々の商売に追われるわたくしからしたら、うらやましい限りだ」

そう言って行商人の男は、脇に置いてある木箱を叩いた。

縦長の箱の中身は蜂蜜だという。男はロジエと名乗り、近在の町々で売り歩いてもう五年になるらしい。固い商売だが一向に金が貯まらない、できれば荷馬車を買って手広く商売したい、というようなことを饒舌に語った。

騎士の世界と同じように、商人の世界にも上下があるらしい。木箱を背負って街道を歩くこの男は、たぶん商人の中でも底に近い存在なんだろう。一掴みの封土、一人の従者も持たぬクロードは、何となくこの男に相通じるものを感じた。

ふと気づけば雨は小降りになり、西の空が明るくなり始めていた。二レの大樹の反対側では旅芸人の一座があわただしく荷物をまとめ出立する気配が伝わってくる。一座の話し声に時折、鳥がさえずるような舞踏女の声が混じった。

「旦那、それで『乳と蜜の流れる大地』はありましたか？」

一座に合わせて出立しようとした腰を浮かしかけたクロードは、ロジエの言葉に思わず動きを止めた。

「なんだって？」

「乳と蜜の流れる大地」とは十字軍のいわば合言葉だ。異教徒に奪われたその聖地を奪還するのが十字軍の使命だった。だが、クロードはロジエに「十字軍に参加した」などと言っていない。

「その湾曲刀ですよ」

目を丸くしたクロードにロジエが笑いかける。

「そいつはサラセンの軍隊がよく使う剣。しかもなかなかの逸品のようです。旦那がどうやってこの剣を手に入れたのか考えると、十字の旗の下に戦った、ってのが一番考えやすいもので」

クロードは右手で顎のあたりを撫で回した。この男、なかなか油断ならない人物のようだ。

旅芸人の一座が二レの樹から離れる足音が聞こえてきたが、クロードは目の前の行商人に興味を持ち始めていた。どうせ女の足だから、少しぐらい遅れても一走りに追いつけるという計算もある。

「遠く東方の武器にも通じているとは驚いたな。ただの蜂蜜売りとは思えないぜ」

「お恥ずかしい、金は無くとも欲だけは深いもので。もし荷馬車を持ったらこんな商品を扱ってみよう、といういろと想像だけは膨らましているんですよ」

ロジェが目を細めて笑うと、いつそう人懐こい表情になった。

「旦那のこの十字軍はいかがでしたか？」

「ひどいもんさ。大將はエリックとかいうクソ貴族だったが、こいつが欲深いくせに戦さのことはてんで阿呆で話にならん。防備の薄いサラセンの町を見つけては空き巣強盗よろしく略奪していくのさ。そのくせサラセン軍が出てくると弱気一辺倒でボロクソにやられたぜ」

「そんな中でも旦那はサラセンの戦士を討ち取った。その湾曲刀が戦利品でわけだ。剣の腕には相当に自信がおりなんでしょう？」

「まあな」

クロードは左手に持った湾曲刀を軽く持ち上げてみせた。

「あんたの、その目利きの腕くらいには自信があるぜ」

「これは、どうも、恐れ入りました」

わざとらしく頭を下げたロジェの仕草が、クロードの笑いを誘った。

二人は二レの樹から出立し、並んで歩を進めた。

雨はすっかり上がり、薄い雲の隙間から日の光が柔らかく照っていた。

ロジエはやはり博識な男だった。およそ商品として取り引きされる物については一通り知っているらしい。クロードがサラセンで見た珍しい産物を、次々と言い当てた。代わりにクロードは剣戟と馬蹄の響きが彩る戦場の話と、ちよつとした小遣い稼ぎの話をした。こちらでも面白そうにロジエは聞いていた。

話が弾むうちに、街道の先を歩く例の旅芸人の一座の姿が見えてきた。舞踏女は金髪がよく映える紺の上衣を着て、行李を背負って歩いていた。

「あの旅芸人たち、おれたちと同じとこに向かうつもりかな？」
何気なくクロードが口を開いた。

「あの人たちは人が集まる所が仕事場ですからね。大きな市とか隊商、そういった所へ自然と群がるものですよ。もちろん、女芸人たちですから、夜の商売もあるでしょう」

事も無げにロジエは言う。クロードは気が気ではなかった。あの清らかな少女のような舞踏女にも客がついてしまうなど、考えただけで喉のあたりが熱くなってくる。

「ああいう連中には関わらないほうがいい。芸人遊びなんぞをしたら、いくら搾り取られるかしたものでないですからね」

言いつつ、ロジエは足を速めた。一気に追い越すつもりか、とクロードは思ったが、そうではなかった。

「でも客として見るなら、あります。幸いこちらには商品がありますからね」

クロードの顔を見てかすかに笑うと、ロジエはいつそう足を速めた。

「道往くお嬢さんたち！」

十分に近づいたところで声を張り上げる。聞き取りやすいくせによく通る、行商慣れした声だった。

「ずいぶん歩いてお疲れでしょう。少し休憩にしませんか？ 甘いおやつをご用意してますよ」

振り返った女たちの前で、ロジエは背の木箱を丁寧に下した。蓋を開けると、三段仕切りに並べられた小さな壺から蜂蜜の香りが立ち上った。

真つ先に歓声をあげたのは舞踏女だった。目を輝かせて、蜂蜜の壺と四十がらみの女とに、交互に視線を移らせていた。

「どうですいい香りがするでしょう。良く肥えた土地のシロツメクサの蜜から取った上等な物です。よほど良いシロツメクサじゃないとここまで強い香りは立ちません。もちろん甘味も抜群です」

ロジエは一つ二つ、壺の蓋を取って女たちに中身を見せた。

「こちらの黒い蜂蜜は栗から取ったものです。ちよつとした苦味と独特の風味があつて人気の品なんですよ。水で溶いて飲んでみてください」

若い女二人も興味をひかれたように、ロジエの手元をのぞき込んでいる。

「ねえお母さん、いいでしょう？ 興行の後に買ってくれるって約束してた櫛、我慢したんだからさ」

舞踏女の甘えた声にも、四十女は渋い顔だ。「でもさ……高いんだろっ？」ちらりとロジエの顔を見る。

「いえいえ、そんなことはありませんよ」

釣れたな、とクロードは思った。値段にまで話がいけば、あとは商人として売るか売らないかだけだ。やはりロジエは商人として才気あふれる男のようだった。

「わたしは実は卸売り専門の商人なんですがね、この道で出会ったのも何かの縁だ。卸値でお売りしますよ。町で買うよりもずっと安いはずですよ」

ロジエが示した金額に、軽く驚いたように目を見開き、それからゆっくりとうなずいた。

最初に大きな歓声をあげたのも、やはり舞踏女だった。残る若い

女二人も嬉しそうに声をあげる。

舞踏女は桃色に頬を上気させながら、飛び跳ねて喜んだ。だがクロードと目が合うと、恥ずかしそうに口元を手で覆い、急にしおらしくなって目を伏せた。

「旦那も少しどうですか？」

女たちが差し出す木製のカップに次々と蜂蜜を注ぎ入れながら、ロジエはクロードにも水を向けた。

「ありがたい話だが、おれの懐具合は寒々しいものなんだな」

クロードは肩をすくめてみせた。いまは多少余裕があるものの、次の稼ぎ口も決まっていない。小銭といえども気軽使えるような心境ではなかった。

察したロジエは無言で自分のカップに蜂蜜を注ぐと、「どうぞ」とクロードに差し出した。

「お代は結構ですよ。商人てのは金ずくで動くものとお思いでしょうけど、そうでもないんですよ。金より大切なものはたくさんありますから」

無邪気そうに笑ったロジエから、クロードはカップを受け取った。素直に貰うのも癪なので、少しだけ反論を試みる。

「だが、『世の中には金で買えないものはない』とも聞くぞ。大志を抱く若手商人としてはどう考えているんだ？」

「ああ、その通りですよ。世の中のたいがいのものは金で買えます。金で解決できる、と言ってもいいですが。たとえ取引相手との信頼関係がなくても、大金があれば商売をすることができます。つまり信頼や人間関係だって、金があればどうにかすることができます。でも逆に言えば、人間関係があれば取り引き以外で使う金を大幅に減らすことができます。そう考えると、手持ち資金の少ないわたしのような行商人が選ぶべき道は、自然と決まってきます」

感心したように聞き入るクロードに、舞踏女が近寄ってきた。「あの……」とつぶやいて自分の水筒を両手で捧げ持つ。気づいたクロードが「ありがとう」と言って右手のカップを差し出した。舞踏

女が赤くなりながら、蜂蜜の入ったカップに水を注ぐ。水筒を持つ手が危なっかしく震えていて、そのたびにカップの中で水が踊った。「さっきの町では見事な踊りを披露していたな」

注ぎ終わるのを見計らってクロードが言うつと、舞踏女は水筒を取り落とすかと思うほどに驚いた。喉元まで真っ赤に染めて、まともにクロードを見ることもできない。そのあわてぶりが度を越している、クロードは呆れてしまった。戦場でたまに酒保商人が連れてくるような商売女にはない、あまりに清らかな仕草だった。

一行はしばし道端の木陰に腰を下ろして、蜂蜜水で喉を潤した。ロジェはさすがに売り物には手をつけずに、水筒の水で渴きを癒していた。

円座になって雑談を交わすうちに、少しずつ一座の内情も知れてきた。旅芸人の一座はやはり仕事を求めて北部へ向かうらしい。

舞踏女が「お母さん」と呼んだ四十女が旅芸人一座の座長で、ルイズといった。お母さんと呼ぶものの、血縁関係はないらしい。いわば一座の主に対する敬称のようなものだ。上の娘二人はコレットとアリス。コレットは歌を担当し、アリスは弦楽器の演奏が上手い。そして一番下の舞踏女が二人が紡ぐ音楽に合わせて踊るのだ。

舞踏女の名はフラヴィーといった。

「クロード様は騎士でいらっしゃるの？」

フラヴィーの声は小鳥がさえさえるようで耳に快い。が、聞かれたことはクロードには素直にうなずけない事柄だった。

「主もない騎士さ。呼ばれたら北へ南へ、どこへでも行く流れ者だ」「まあ、では遍歴騎士でいらっしゃるのね」

フラヴィーは数多くある騎士道物語になぞらえて、そんなふうに呼んだ。クロードの心の中には違和感があったが口には出せなかった。軽く尊敬の混ざったフラヴィーの眼差しが、クロードをわずかに高揚させたのだった。

「こらフラヴィー、そんなに不躰に聞いたらご迷惑でしょう」

コレットが三人娘の年長者らしく、穏やかにたしなめる。

「ごめんなさいね、クロードさん。この子、ほんとにまだ子どもみたいで」

肩まで垂らした黒髪を揺らしながらコレットが言う。子ども扱いされたフラヴィは一人、唇を尖らせていた。

「ダメだよ姉貴、いい男の前だからって大人の女ぶってもさ。姉貴は詰めが甘いからすぐにバレるよ」

静かに蜂蜜水を飲んでいたアリスが忍び笑いをもらしながら口を挟む。地味な亜麻色の髪を耳の辺りで短く切りそろえていて、活発そうによく動く瞳とあいまって、まるで少年のように見える。

「アリス！ 何を言い出すのよ」

「だってそうだろ？ 前の町で姉貴がコナかけてた商家の御曹司だつてさ、いい雰囲気みたいだったけど結局ふられたじゃん」

「あー！ それわたしも知ってる。コレット姉さんがずーっと見つめながら歌ってた男の人でしょ。ふられちゃったんだ」

フラヴィが興味津々といった調子で目を光らせた。

「あれもやっぱり姉貴のじゃじゃ馬っぷりが隠し切れなかったんだと、あたしは思っただよね。やっぱり猫をかぶるにしても、もっと厚くて質のいい毛皮をかぶったほうがいいと思うよ」

「アリス！」

言うが早いか、コレットは立ち上がってアリスの首元を抑えようとする。だがアリスは素早くコレットの手から逃れた。

「ほら姉貴、もうおしとやかな化粧がはがれて、司教様の説教に出てくるサタンみたいな顔になってるって」

笑いながらアリスはクロードの背に回りこむと、「助けて、クロード様」とか言って手を組んでいる。うまくからかわれたコレットは顔を真っ赤にしてうつむいた。フラヴィは足をばたつかせながら笑い転げていた。

「あんたたち、あんまり身内の恥をさらすんじゃないよ。まったく、ルイズがあきれてため息をもらすまで、三人はクロードをだしにしてじゃれあっていた。」

ロジエは一団の様子を観察するだけで、積極的に会話はしなかった。問われたことにはにこやかに答えて、如才なく対応していた。「さあ、そろそろ立ちましよう。日が暮れるまでに次の町に着かないと、今夜は野宿になりかねません」

頃合いを見計らったロジエの一言で、各々が荷物を抱えて出立の準備を始めた。荷物のないクロードは、湾曲刀を腰に差し、ずだ袋を背負って準備を終えた。女たちが楽器を背負い、鼓を肩から提げて、小道具が入っているらしい木箱を両手に持つのをぼんやりと眺めていた。ことにルイーズが背負った木箱はやけに重そうで、中年女の小さな体を押し潰してしまいそうだった。

「ルイーズさん、荷物を二つ持とうか？」

「いえいえ旦那様、どうかお気遣いなく。これはあたしらの商売道具ですから。旦那様だつてご自分の剣を他人に運ばせたりはなさらないでしょう」

なるほどもつともない分で、クロードも納得するしかなかった。街道を三時間ほど歩くと、小さな町が見えてきた。陽はすでに西に傾いて赤い光を投げかけている。

「やれ、どうにか暗くなる前に着けましたね」

ロジエが荷物を背負い直した。

「旦那、この町に宿屋は一軒しかありません。教会前の広場の近くにありますから、そこで落ち合いましょう。わたしは先に行つて得意先を回ってきます」

そう言つてロジエは足早に去つていった。

木の柵で囲われた門をくぐると、ほんとうに小さな町だった。ぽつりぽつりと家屋が散在して、看板を掲げた店屋は数えるほどしかない。町に一軒の宿屋もすぐに見つかったので、クロードと女たちはともに歩いていった。

宿屋も町にふさわしい粗末な木造の建物だった。入り口を進むと広間になっていて、居酒屋を兼業しているようだった。木箱をテールブルの代わりにいくつか並べ、その周囲に丸太を切り出しただけの

イスが乱雑に置かれている。まだ時間が早いのか、客はほとんどいない。奥のカウンターでは宿の亭主らしい親父が仏頂面で座っていた。

クロードは亭主から一部屋借りると、「後から一人来る。ロジェという商人だ」とだけ告げて、宿部屋へと続く扉に向かった。去り際に後ろを振り返ると、ルイズが亭主相手に声高に話していた。「流しの旅芸人」と聞いた亭主の顔がいつそう厳しくなるのが目の端に見えた。

部屋に入っても、クロードは落ち着かなかった。廊下からは女たちのかしましい話し声が近づいて、また遠ざかっていった。とくにあのフラヴィの声は一段と高くてよく聞こえた。クロードは湾曲刀を剣帯から外して、柄に彫られたされた獅子の模様を意味もなく指でなぞっていた。

2・舞姫

ロジエが宿に来たのは日もとつぷりと暮れた頃だった。

「遅くなつて申し訳ない。食事はもう済ませましたか？　まだでしたら一緒に居酒屋でどうですか」

商売の熱気がまだロジエの頭に残っているのか、やけに張り切っていた。

居酒屋には近在の村人も集まっているのか、意外な賑わいを見せていた。壁際の空席をようやく見つけて座ると、二人はパンと豆のスープ、それからブドウ酒を一杯ずつ注文した。

「隊商がこの近くを通るらしいんですよ」

乾杯もそこそこにロジエが語り出す。

「かなり大規模な隊商らしくて、一つ西の本街道を通るそうなんですがね。行き先は北部のトロワです」

トロワ、と聞いてクロードの眉がかすかに動いた。十五歳で飛び出した彼の故郷だ。

「わたしはその隊商に加わろうかと思っています。いつまでもこんな田舎でくすぶっているよりも、かの大都市で有名なシャンパーニュ地方に出てみたい」

ロジエにしては珍しく瞳に輝かせて熱弁していた。

「旦那も一緒に行きませんか？」

固いばかりでやけに軽いパンをクロードは手でむしり取った。

考えるまでもないことだった。もともと北部へ向けての旅であつたし、隊商の行き先がトロワと聞くと望郷の念もわいてくる。

だが、そうなるにあの旅芸人一座とはお別れだ。同じく北部を目指すとはいえ、道を違えれば再び会うのは難しい。クロードは承諾の言葉が出かかった喉に、ちぎったパンを押し込んだ。

雑然とした雰囲気居酒屋に、突然に華やかな女の声が響いた。見ればきちんと着飾ったルーズが朗らかに旅芸人の前口上を述

べている。化粧を施し髪も整えて、街道で荷を負っている時とは別人のようだった。居酒屋に集まった客相手に、日頃磨いた芸の披露が始まるようだ。

客の拍手を受けてルイズの口上が終わると、さっそくアリスが小気味良い調子で弦楽器を奏で始める。あまり音楽になじみのないクロードでも思わず聞き惚れてしまうような鮮やかな音色だ。見識の広そうなロジェも、ちよつと首を伸ばしてアリスの方に目を注いだ。

アリスの弦楽が最高潮に達する頃、コレットが艶やかに歌い始めた。クロードも聞き慣れた「小さな女羊飼いだ」だ。

ある騎士が草原で無垢で美しい女羊飼いと出会い、恋をする。燃えるような二人の恋は、しかし身分の壁に引き裂かれてしまう。コレットは身を揺さぶる恋心の高まりを、胸を押し潰す別れの悲しみを、情感たつぷりに歌い上げた。「騎士様 騎士様 わたしは忘れない あなたに触れた唇も あたなが残した傷も」そんな女羊飼いの独白で物語は終わる。

歌が終わると喝采が巻き起こった。気の早い客はもう銅貨を投げている。ロジェも感心したように拍手を送っていたが、クロードはなぜだか素直には賞賛できなかった。投げやりに数度拍手すると、ブドウ酒を少し多めにあおった。

再びアリスの演奏が始まった。今度は激しく弦をかき鳴らす、情熱的な楽曲だ。

突然に、クロードの視界にふわりと真紅の花が舞った。

フラヴィだ。

血を滴らせたような赤い服に身を包み、彼女が客の前にぱつと躍り出したのだ。アリスの弦楽に合わせて軽快に足を踏み鳴らす。舞踏で引き締められた体の線がうつすらと見えるような毛織りの一枚着で、胸のあたりには膨らみを演出するように花の飾りがついていた。

クロードは食事も忘れてフラヴィの姿に見入った。

フラヴィの伸びやかな肢体が弦楽に乗って麗しく動く。結い上げた明るい金髪の毛先が軽やかに揺れる。彼女が身を翻すと、スカートの裾が一瞬だけ小さく花を咲かせた。

「旦那はあの踊り子がお気に入りみたいですね」

フラヴィの動きを目で追うクロードに、ロジェは笑いを含ませて言った。口元を緩めているロジェを一瞥しただけで、クロードは何を言わなかった。

フラヴィが舞いながら客席に近寄った。濃い色彩の化粧が施された顔で笑いかける姿は官能的ですらあって、客席からはさかんにチップが飛んだ。なかには銀貨を投げる分限者もいて、踊るフラヴィを銀の輝きが華やかに飾り立てた。

妖艶な笑みを浮かべたまま、フラヴィは客席を端から眺め回す。そのうちに彼女の視線はクロードのそれと交錯した。

ほんの束の間、フラヴィの顔から遊女の笑顔が消えた。恥ずかしそうに頬を染める、少女の清らかな表情が浮かんだ。

だがクロードが瞬きする間に、フラヴィはもう別の客の方を向いていた。顔には元の華やかな笑顔を作って、精一杯に愛想を振りまいていた。

クロードが面白くもなさそうにカップを指で弾く。その様子をロジェは興味深そうに眺めていた。

隊商の話は明日まで返事を待ってくれないか。部屋に引き上げたクロードは、ロジェにそう言った。

「構いませんよ、本当は明日の朝一番に立ちたいところですが。ゆっくり考えてください」

ロジェは笑いながらそう言って、「小さな女羊飼」の騎士のようにはならないうでくださいな、と付け加えた。

余計な事を、とクロードは思ったが、こちらの考えを見透かされているだけに、何も言えなかった。

クロードの頭の中で、フラヴィの妖艶な笑みと無邪気な笑い顔が混じり合っていた。考えをまとめようにも、その二つが目の前でちらついて、落ち着きなく部屋を歩き回ってしまう始末だった。

「少し外の空気に当たってくる」

言い残してクロードは部屋を出た。

柱も木造りの壁も丁寧に磨かれて、鈍い飴色に光っている。強面の宿の主の見た目に反して、宿は掃除が行き届いて清潔感があつた。宿の廊下を歩いていると、ちょうど部屋から出てきたフラヴィと鉢合わせになった。華やかだった踊りの衣装も、街道を歩いていたときと同じ紺色の上衣に着替えている。

お互いに立ち止まって顔を見合わせた後、どちらともなく目を伏せてしまった。

「あの……わたしが踊るところ、あまり見ないでください」

か細い声でフラヴィはそう言った。化粧も落としたフラヴィはもう清楚な少女に戻っていた。胸元に手を置いて、耳まで赤く染めている。

「おれが見ていては都合が悪いのか、その……、おれのような流浪の無頼にはふさわしくないと」

何を馬鹿なことを口に出しているのか、そう思いながらもクロードはうまく頭が回らない。フラヴィに拒絶されたように感じて、思わず言葉がぶつきらばうになってしまった。

「そうではありません！ クロード様に拍手をいただけると、わたしすごく嬉しいんです。でも、クロード様に見られていると、胸が痛くなってしまう。手も足もこわばってきて、とても下手な踊りをしてるような気がするんです」

「そんなことはない。見事な舞いだっただ。しばらく食べることも忘れてしまつて、ロジェにからかわれた」

苦笑いするクロードに、つられてフラヴィも笑った。鈴を鳴らすような、とはこういう笑い声のためにあるのだな、と思うほどに清々しい。

「まったく素晴らしい踊りだった。よほど小さな頃から鍛えたんだろう。おれも剣術だけは子ども頃からたたき込まれて自信はあるが、まあいい勝負だな」

「まあ、クロード様、剣が得意でいらっしゃるのね。そうだ、一つわたしに指南してください」

いきなりの言葉にクロードは驚いてフラヴィを見返す。

「お母さんは『剣でも槍でも曲芸でも、その道の達人にはぜひ教えるを乞いなさい、それが舞踏の技にもなるから』っていつも言っていました」

フラヴィの小さな手がクロードの腕を無造作につかんだ。フラヴィのてのひらから柔らかな温もりが伝わる。まるで上質の綿でくるまれたようだ。あまりに無防備な接触で、クロードは自分の顔が少し赤くなるのを感じた。

クロードを強引に「さあ、こっちこっち」と引つ張つて、フラヴィは宿の裏口を抜けて庭へと連れ出した。すっかり夜も更けていたが、空に満月に近い月が出ていて、お互いの顔をはつきりと照らし出していた。

フラヴィは手近な棒きれを二本拾って、「お願いします」とクロードに差し出した。

「じゃあ、簡単な守りと攻めの手だけ」

とクロードが前置きして、二人は月下に対峙した。

クロードがゆつくりと振り下ろす棒を、フラヴィが横に構えて受け止める。受けた棒を今度はフラヴィが払って、胴に打ち込む。クロードが棒を立てて、軽く音を立てて弾いた。

「大事なのは、相手の攻めは必ず剣の平でつけることだ。刃で受けたら、あつというまに切れ味が鈍るからな」

フラヴィはやはり舞踏で鍛えられているせいか、筋が良い。クロードが教えることをすぐに飲み込んで、棒きれを剣に見立てて持つ姿がさまになっていた。棒の振りもなかなか鋭い。自由に打ち込みをさせてみると、たまに剣気のようなものを放ってきて、クロード

は半分以上本気になってフラヴィの棒を払った。

「うまいもんだ。これなら貴族の騎士見習いくらいなら打ち負けせるかもしれない。何か習っているのか？」

「いえ、特別なものは何も。お母さんから教わったものだけです」
フラヴィは息も乱していない。体力も並々ならぬものがあるらしい。

なかでもクロードの目を引いたのは、フラヴィの踏み込みの鋭さだ。棒を構えたクロードを恐れることもなく、それこそ肩が触れ合わんばかりまで迷いなく踏み込んでくる。舞踏の足さばきを応用しているのか、などと考えながらクロードは右に左にと打ち払った。ふと、フラヴィの動きが止まった。棒を構えたままで、じっとクロードを見据える。彼女なりに、いまの攻め手ではクロードの体に触れることさえかなわないと感じたらしい。棒を握り直し、難しそうな顔をして必死に考えをまとめている。

こいつがもし男だったら、騎士の従者として引く手あまただったかもしれない。そう思いながらクロードもまた棒を握り締めた。体だけではなく頭脳も駆使して修行する剣士は一流になる可能性がある。小さな額の奥でフラヴィがどんな攻撃を組み立てているのか、クロードはにわかに興味が湧いてきた。

「フラヴィ、いいぜ。思った通りに打ち込んで来い。まともな剣の技じゃなくてもいいさ、おれの体に棒を当ててみる」

うながされたフラヴィが少しだけ笑った。だがすぐに真顔に戻ると、じっと剣を構えたクロードを見つめる。

白い月の光に染められたフラヴィの髪が揺れた。
来る。

フラヴィが飛ぶように一歩を詰めた。短く気合の声を発しながら右手の棒を大きく伸ばした。

（突きか！）

踏み込んだ勢いをそのままに、クロードの体を貫かんばかりの渾身の一撃だ。ぞくり、とクロードの背筋に冷たいものが走る。考え

るまもなく体が勝手に動き、顔面に突き出された棒を力いっぱい打ち払った。激しい衝突の音がしてフラヴィの棒が弾け飛んだ。

しまった、と思うがもう遅い。手加減なしで棒を払われたフラヴィは大きくバランスを崩した。細身の体が支えを求めるように傾いて、そのままクロードの胸に倒れ込んだ。

月の光だけでもなお明るい金髪がクロードの鼻先で揺れる。

フラヴィの体を受け止めたクロードはすっかり狼狽してしまった。小さな肩を抱くような体勢で、そのまま固まってしまう。服越しに触れるフラヴィの肩は引き締まりながらも柔らかい、まるで手のひらに吸いついてしまいそうな感触だ。

このまま背中に腕を回してしまえば、いやそんな商売女に対するようなことができようはずがない。クロードは頭の中で火花が散るような心地だった。

突然にフラヴィが胸の中で笑い出した。忍ばすような含み笑いは、そのうちに彼女の中でこらえきれなくなり、華やかな笑い声となって爆ぜた。どうも自分が転倒しかけたことが妙におかしかったらしい。

男の胸に抱かれた意識など、微塵もなかったようだ。フラヴィはクロードの厚い胸板から体を離すと、笑いを抑えるように深呼吸を一つ。「さあクロード様、もう一手、もう一手」と少しむきになって挑んでくる。まるで子どもだ、とクロードはその時は思ったのだ。

寝つきが悪く、しかも眠りは浅かった。クロードが目を覚ました時、まだ暗い夜明け前だった。

昨夜、ロジエが隣のベッドで安らかな寝息を立てている頃、クロードはいつこうに眠気が襲ってこなかった。フラヴィのあの揺れる金髪がまだ鼻先にぶらさがっているような気がして、目が冴えたままだったのだ。

それでも数時間ぐらいは眠れたのだろうか。体はひどく重く、頭の中も霞がかっているのに芯の方だけが熾火のように熱い。ベッドを起き出したクロードは水を飲もうと、庭の井戸に向かった。

昨日、フラヴィの顔を美しく照らした満月が西の空に沈みかかっている。もう夜明けは近い。

井戸の水場には人影があるようだった。少し肌寒い秋の夜明けだというのに、水を使っているのだろうか。考えながらクロードは歩を進めた。

水場にしゃがみこんだ人影には流れるような金髪が腰まで届いている。その正体に気づく前に、向こうから声をかけてきた。

「クロード様」

振り返り、嬉しげに立ち上がって手を振った。まぎれもなくフラヴィの声だ。その姿を見たクロードは目を疑った。

体を拭いていたのか、上半身裸でフラヴィは手を振っている。手で隠そうともしない裸身は女性特有の丸みがほとんどない。まるで飾り気のない素槍のように、手も足もただ細く伸びている。胸にはほんの少し、申し訳程度の膨らみがあるだけだった。

豊かな金髪をすべて下ろしてしまつと、まったく十二、三歳の子どもだった。おそらく舞踏の衣装に詰め物をして、年頃の娘らしく装わせていたに違いない。

（おれが胸を高鳴らせていた舞踏女とはなんのことはない、おれが生み出した幻だったのか）

そう思うと、クロードはなんとも情けなくも笑えるような気分になった。

フラヴィに近寄つたクロードが、ぼんと彼女の頭の上に手を置いた。

「あのな、おれは一応男でおまえは女なんだ。せめて体を隠せよ」
呆れたように言うクロードの顔が、またフラヴィにはおかしかつたらしい。くるくると笑いだした。そうやって笑う姿も、改めて見ればいかにも子どものものだ。

「いけない。またお母さんに叱られちゃう」

笑いながらそう言うと、ようやく側に置いた衣服を着はじめた。そんな姿を見ているとクロードの胸を突つつきまわしていた慕情も、霧が消えてしまうように清々しいものに変わってしまう。クロードの瞳の曇りが取れてしまうと、目の前でようやく服を着て少し恥ずかしそうに笑いかけるフラヴィは、まったく「可愛らしい女の子」だった。

「クロード様も朝の鍛錬ですか？」

少し首を傾げながらフラヴィは言う。

「鍛錬？ いつもこんな夜明け前の暗い中で舞いの鍛錬してるのか？」

「ええ、お母さんが技を他人に見られるの良くないからって、いつも練習は暗いうちに終えてしまっんです」

へえ、と答えつつもクロードはやや意外な思いがした。他人に見られたら困る技など、まるで剣術の秘技でも磨くような不可解な言い様だ。どうせ観客に披露する舞踏の技なら、見られて困ることもなかりうに。

薄くなり始めた暗がりの中でカラスの鳴き声が聞こえた。東の空が赤く透き通っている。まもなく夜明けだ。

朝の最初の光がフラヴィを照らしたら、この子はどれほど澄み切って輝くだろうか。日の光を呼び寄せる金色の髪はなめらかに背中まで流れている。体を動かしたからだろうか、わずかに朱が差した白い肌も朝日を浴びればいつそう美しく染まる。

五年、いやあと三年か。そのくらいの年月がフラヴィに降り積もれば、どんなに気難しそうな堅物の男でもたちどころに恋に落ちてしまう、そんな美女にフラヴィはなってしまうに違いない。戦場を流れるばかりで一向に浮き上がる気配のない、自分のような塵芥の騎士にはまったく手の届かない存在に。クロードはフラヴィを見つめる目を皮肉っぽく細めた。

「夢は王国一の踊り手か？」

「夢……ですか？」

問われたフラヴィは目をしばたいて考え込んでしまった。

「わたし、物心ついた頃からずっとお母さんたちと旅をしてました。舞踏もいつ頃からだろう、もう思い出せないほど小さな時からです。だから、夢と言われると……」

フラヴィは腕を組んでうつむいてしまった。夢、夢とつぶやきながら眉間に小さな皺を寄せている。

そうしているうちに、何かを思いついたようにフラヴィはさっと顔を上げた。

「じゃあ、クロード様。あなたの夢はどんなことですか？」

「おれか、おれの夢はそうだな……」

「待って。当ててみせます」

フラヴィは悪戯っぽくそう言うと、再び眉間に皺を作り始めた。

「あ！ わかりました。天に険する山に住むという竜を討ち取ることでしょう」

クロードが苦笑う。この子は本当に自分のことを騎士物語に出てくる遍歴騎士だと思っているようだ。

「違う。こんなぺらっぺらのだんびらで竜の鱗を貫けるはずないだろう」

腰の湾曲刀に手を置きながらクロードは言った。フラヴィはますます眉根を寄せる。

「それでは、クロード様につり合うような美しいお姫様を探し出すこと？」

「はは！ 悪くはないが、まずは己の身を立てることが先だな」

「身を……立てる？」

怪訝な顔でフラヴィが見つめ返す。透き通った青い瞳に少しでも困惑したような色が浮かんだ。

「そうだ。おれには治めるべき領地もないし、ともに戦う従者の一人もいない。おれが持っているのは騎士の血脈と多少の剣術だけだ。このままじゃ、おれはただの荒くれ者と変わらんのさ」

水場の石段に座るとクロードは太い腕を頭の後ろに組んで、自嘲するように空を見上げた。東の空はいよいよ赤い。満天の星の明かりも暁の光に次々と押し流されていく。

「おれはルエルという小さな騎士の家の五男坊なんだ。兄貴たちとは仲が良かったが、貧乏な騎士の家じゃあ相続の目がなくてな。十五の時に家を出た。剣の腕には自信があっただ。兄弟の中でも飛び抜けて強かったし、戦場に出て手柄を上げればすぐにでも出世できる」

腰の剣帯から刀を外して空に掲げる。鞘の漆黒が明け始めた紺の空から少しだけ浮いて見えた。

「そう思ってたんだ」

苦味を帯びたクロードの話し声に、フラヴィはいつのまにか胸の前で手を結んでいる。

「活躍……できなかつたんですか？」

「したさ、縦横に剣を振るってやった。何回か戦場に立ったが、おれの前に長く立っていられる奴はいなかった。それなりに名のある剣士を討ち取りもしたが、ただそれだけだ。立てた手柄は上の貴族連中に持つていかれて、おれはわずかな給金を持たされて放り出される、その繰り返しだ」

戦場を渡り歩いた五年はいつたいなだったのだろう。思い返してクロードは鼻で笑った。結局得たものといえば、この湾曲刀だけ。金はもちろん、騎士の名声も仕官の話もない。

そんなクロードの様子にフラヴィは面食らってしまったようだった。水場の敷石のあたりに視線をさまよわせて、話すべき言葉を頭の中で探してるように見えた。

「悪かったな、小難しい話をしてしまった」

「いえ、そんなこと」

フラヴィは顔を上げない。

「でも、少しうらやましいです」

「なぜだ？ おれの境遇なんてちよっと剣が使える流民みたいなも

んだぞ」

いぶかしむクロードに、青い瞳がまっすぐに向けられる。

「あら、流民というならわたしたちだって、都市から兵隊さんの駐屯地まで人の集まるところならどこへでも流れていく流民です。それに、クロード様はご自分が成すべきことをちゃんと見ています。

戦さ場で勇敢に戦う先には、立派な騎士になるという像を描いていらつしやるのですもの。だから、剣の稽古も怠らないし、戦さ場にも勇気を振り絞って向かっていくのでしょうか。わたしにはそれがうらやましいんです」

フラヴィはそう言って、敷石を舞台にして舞踏のステップを踏んだ。細い足が刻むリズムに合わせてしなやかに腕が舞い、流れる金の髪が跳ねた。流麗な動きに、一瞬でクロードは目を奪われた。

四度ほど靴を鳴らして、フラヴィはクロードに向き直った。その顔にどこかさみしげな翳りがある。

「こうして踊ることの先にあるものが、わたしには分からないんです。そういうの、たぶん夢っているんでしょうけど。確かにわたしが踊るとお客さんからお金を貰えて、それで生きていくことはできますけど、やっぱりただそれだけなんです」

視線を落としたフラヴィがいつそう儚げに見えた。

「それに、アリス姉さんとコレット姉さんはたまに……。『フラヴィ、おまえも男の人の相手なんかもしてるみたいで……。』フラヴィ、おまえもそのうちにやってもらうから、覚悟だけはしときな」ってお母さんが。そういうのも、わたし、嫌というか、どうなのかなって思ったりして」

恥じらいというより、単純に嫌悪の色がフラヴィの顔に浮かぶ。おおかたを察したクロードは何も言えなかった。

例えるならフラヴィはいま、ほんの少し綻びかけた蕾だ。花弁が開けばだれもが感嘆するような、目も覚める色彩と甘い香りを放つに違いない。しかし、美しい花はいずれ誰かに手折られる。意中の人に手向けるならまだ納得もできようが、フラヴィは流れの芸人一

座。その運命は、知れないのだ。

哀れだとは感じた。

心が冷えるのに、クロードにはどうすることもできない。まさかフラヴィの身を一座から引き取ることもできない。そんな金はクロードの身を逆さに振っても出てくるはずもなかった。

ロジェの言葉が腹の底にどこかひっかかっているようでもあった。コレットが居酒屋で歌った「小さな女羊飼」の悲恋は、身分の壁以上に二人の生き方の相違が恋を別ったのではないのか、そんなふうにいまクロードは感じていた。

遠くの山の頂から太陽がわずかに見え始めた。明るい光が悲しげに瞳を揺らすフラヴィを照らしていく。髪を下ろし化粧も抜いて、朝の光に立ち尽くす彼女はやっぱり年相応の子どもで、健康的な美しさはあるものの艶やかさとはまだ無縁に思えた。

「おれも隊商にひつついていくことにした」

朝食代わりの干しイチジクを嚙みながら、クロードは言った。ロジェの方はカラス麦の粥をすすっている。

「隊商の護衛を申し出れば、飯と寝る場所くらいは与えてくれるだろ。旅費なしでトロワまで帰れるんだから悪くない話だ」

クロードの顔がやけにさっぱりしているの、ロジェは何事か勘ぐったようだった。探るような目つきをするものの、追求はしてこなかった。

「決心しましたか。わたしも旦那とは別れがたく思っていたのほっとしましたよ。そうと決まればなるべく早く立ちましょ。隊商は一つ西の街道を北上してきます。万ーのことがあって、すれ違いになっちゃいけません」

ロジェはすぐに荷物をまとめだした。昨日背負っていた蜂蜜はこの町ですべて売れてしまったらしく、木箱は折りたたんでずだ袋に入れて、身軽な旅装だった。クロードにしても準備するほどのもの

はない。湾曲刀を腰に差し、差しずだ袋を背負ったら、あとは野宿でもなんでもござれだ。

部屋を出て広間に向かうと、ちょうど旅芸人の一座も出立するところらしかつた。最初にクロードを見つけて「おはようございます」と元氣にあいさつしたのは、やはりフラヴィだった。

「旦那様方も出発でございますか。今日も街道を北へ上るので？」

「いえ、わたしたちは西へ足を向けることにしました。クロードの旦那にもわたしの商用に付き合ってもらうんですよ」

その言葉を聞いたフラヴィの目が大きく見開かれた。クロードは見えていられなくて、さっと目を逸らした。

「左様でございますか。ではこちらでお別れですね。短い間でしが楽しい道中でした」

さして感動したふうでもなくルイズは言った。だがその隣のフラヴィは小さな唇を尖らせて、うつむいていた。

その様子があまり儂げなので、クロードはフラヴィに近づいて肩に手を置いてやった。

「お別れだ、フラヴィ。でも永久にじゃない。今度会う時は、そうだな、おまえは王国一の踊り手になっているかもしれない」

「未来のことはわたしには分かりません。でもクロード様、もう一度会ったなら、また剣を教えてください」

少し涙まじりの声になったフラヴィの言葉は、ルイズの「さあさあ、いつまでも名残りを惜しんでも仕方ない。立ちましようよ」という声に遮られた。

宿の前で一行は別れた。フラヴィだけが振り返りクロードを見ては、いつまでも手を振っていた。

「旦那」

「どうした？」

「わたしはてつきり、旦那はふられたんだと思ってたんですがね」歩き出したロジェが不思議そうに言った。

「なんだよ、ずいぶんとはつきりした言いようだな。別におれはあ

の子に求愛なんてしていないさ」

「そうでしたか。わたしの見当違いだったようで」

村の通りには農耕に向かう牛馬の鳴き声がのんびりと響いていた。大きな鋤を担いだ農夫が後に続く。

「でも、そうだな、多少うぬぼれていいなら初恋の相手くらいにはなったかもな」

「なんですか、それ。気持ちの悪い」

ロジエの顔が心底嫌そうだったので、思わずクロードは吹き出してしまった。

「ちよつとした冗談なのに、そんな手厳しいこと言うなよ。ほら行こうぜ、隊商と夢のような稼ぎ話が待ってるんだろ」

青く透明な空が二人の上に広がっていた。秋の終わりを予感させる冷気がゆっくりと空から降りてくる、そんな旅立ちの日だった。

3・騎士と傭兵と盗賊

ゆるやかな丘がいくつも連なる平原に、膝を埋める草の緑が茫洋と風に揺れていた。秋の光が優しく肌をなぞり、風は農作物の実りの匂いを少しだけ含んでいる。

クロードには懐かしい風景だった。彼が従軍していた十字軍の遠征先では太陽がもつと苛烈に肌を焙った。大地は乾燥してところどころ焦げ茶色の土があらわになっていた。

いまから生まれ故郷に帰ると思うと郷愁の気持ちもいよいよ心地よいものだったが、そんな感傷ばかりにひたっているわけにもいかなかった。

「おいロジエ、本当にこの方向で間違いないんだな？」

クロードは草を踏み分けながら、隣を歩く優男風の商人に聞いた。「ええ、問題ありません。隊商が通る本街道はわたしたちが北上していた街道と平行に走っていますから、太陽が沈む方向に歩けば自然と本街道にたどり着きますよ」

あまりに軽いロジエの言いようだった。その手には地図もなく、たまに生えている丈の高い草を払いのけるのに忙しかった。

ロジエの言い分は理屈であって、なるほどクロードも納得するよりほかにない。だが近道をしようと街道から草原に分け入って頃は、あたりの草は靴にかかる程度だったが、いまでは脛当てまで朝露でぐつしりと濡れている。さらに小川でも現れたらもつと不快な思いをしなければならない。

道無き道を進んでいくことに、ロジエはそれほど抵抗が無いようだった。脛の水気も気にせずに、クロードの前を意気揚々と歩いていく。抜け目なく商売するかと思えば、こんな大胆な行動に出たりもする。どうもロジエは一筋縄ではいかない男のようだ。

さんざん歩いた後に「道に迷いました」なんて言い出したら拳骨を喰らわせてやるか、クロードはロジエの背を見ながら右拳を固め

ていた。

そんなことをクロードが考えていると、ふと馬蹄の音が遠くから聞こえてきた。音はみるみる近くなって、五騎が姿を現した。精悍な鹿毛馬の跨った男たちは、武装しているものの騎士ではない。籠手も脛当ても胴鎧も、それぞれに形状や形が統一されていないものを一緒にして体に貼り付けている。傭兵くずれか盗賊か。クロードは外套の下で右手を湾曲刀の柄に添えた。

「旅の商人か」

クロードたちの目の前に馬が止まった。馬上の男たちはいずれもすさんだ顔にいやらしい笑いを浮かべている。

「その通りです、騎士様。何かご入り用でしょうか？」

ロジェはあくまでにこやかに答える。目だけが油断なく光り、騎馬の男たちの出方をうかがっていた。

「ふん、ご入り用だと？ おれたちの望みはてめえらの財布の中身だ。大人しく差し出せば身ぐるみはがすくらいで勘弁してやるぞ」
「おや、これは困りました。それにしても、こんな大人数でわたしたちのような懐もさみしそうな二人連れを襲うなんて、ずいぶんと慎ましやかな話ですね」

柔らかな声に少しだけ皮肉っぽい響きが混じる。ロジェはまったく盗賊たちを恐れていない。内心はともかくとして、軽く笑みを浮かべたままの表情には動揺の色はまったくなかった。

「当たり前よ。おめえらを襲うのなんざ、単なる小遣い稼ぎだ。本命はここらを通るって噂の隊商だ。金も商品も全部奪えば、当分は遊んで暮らせる」

盗賊の一団の真ん中に馬を止めた男が野太い声を張り上げた。この男だけは揃いの甲冑一式を着込んでいる。三十半ばの大柄なこの男が頭目と見て間違いなさそうだった。クロードはロジェの背後にそっと忍び寄った。

「おいロジェ」

耳元でささやく。

「おまえ、馬には乗れるか？」

盗賊たちに視線を向けたまま、ロジエはほんのわずかにうなずいた。

クロードは満足そうに口元を歪めると、右の二騎の男たちを見る。一団の中では線が細く、与しやすそうな相手だ。

弾かれたようにクロードが動く。ぱつと外套の前を開いたかと思うと、右手から短剣が放たれた。

「ぐわ」

「ぎゃあ」

一息に二投、うなりを生じた短剣は右の男二人の喉元に突き立った。血を噴き出しながら男たちは馬の背から転がり落ちる。

「乗れ！」

すぐに二頭の手綱を掴んだクロードは、一頭をロジエに預けると、大地を蹴って馬上に飛び上がった。ロジエも一拍後れて鞍に腰をつける。

「逃げろ」

クロードは湾曲刀を引き抜きざま、ロジエへ怒鳴り声をあげた。

あまりのクロードの早業に盗賊団の残り三人は自失していた。だがロジエが逃げだそうとするのを見て、ようやく我に返った。

「おのれ！」

手下の一人がロジエを逃がすまいと駆け出した。すかさずクロードは馬を寄せて、袈裟斬りを叩き込む。四歩と走ることなく、手下は血をまき散らしながら草むらの中に倒れた。

十を数えるほどの間に、盗賊団は人数を半分以下に減らした。さきほどまで横柄な口をきいていた頭目も顔色を

失って、血刀を肩に乗せ不敵に笑うクロードを凝視した。

「貴様、傭兵か」

「騎士だ、間違えるな阿呆が。名はクロード・デュールエル。盗賊風情に名乗るなんざもつたないが、てめえの魂を刈り取る死神にでも教えてやれ」

クロードの挑発に頭目は顔を赤くしていきり立った。

「盗賊ではない、傭兵だ！ 王国の戦場でヒグマのドン・ガスパロと恐れられる戦士とはおれのことよ」

「悪いな、おれはここ一年ほどよそへ遠征に出てから、そんな名前は知らねえや」

「ならば貴様の体に直接教えてくれるわ」

そう言い放つとガスパロは腰の長剣を抜き放ち、突進した。クロードも湾曲刀を掲げて馬を合わせる。

馬の勢いをいかしたガスパロの刺突はクロードの予想以上に力強い。刀身をひねってなんとか刺突をそらせた。

長剣と湾曲刀が交錯し、馬と馬の肩がぶつかった。ガスパロは騎手としても優れた男らしい。前に横にと巧みに馬の肢を操って、的確に突きを繰り出してくる。そのたびにクロードは湾曲刀で払い、受けた。

ガスパロの刺突の間隙を縫って、クロードが斬撃を放つ。狙いすぎました一撃はしかし、ガスパロの胴鎧に阻まれて火花が散った。力強い打撃を胸に受けてガスパロが軽く咳き込んだ。

分が悪い。湾曲刀を注意深く操りながら、クロードは冷静にそう思った。ガスパロが完全武装なのに対して、クロードは平装だ。おまけにクロードは、騎馬の戦いがそれほど得意ではなかった。

クロードが鞍にちらりと目をやる。鞍には弓と矢の束が詰め込まれた矢筒が取り付けてあった。

突如、クロードは大きく馬を進ませてガスパロに斬りかかった。あえてガスパロに見せつけるように、大袈裟に湾曲刀を振るって斬りかかる。勢いをつけた強烈な斬撃を、ガスパロは馬ごと退いてかわした。

クロードの予想した通りの動きだった。斬りかかった勢いのまま、クロードは馬をあおってガスパロの脇を走り抜けた。驚いたガスパロはあわてて後を追う。

「待てクロード、騎士の分際で勝負を投げ出すのか」

叫びつつ走るが、重い鎧のせいで馬の肢がいかにも鈍い。クロードとの差はあつというまに広がった。

「誰が投げ出すかよ、東方で学んだサラセン式の馬上弓ってやつだ。喰らえ！」

クロードは湾曲刀をいったん腰に戻すと、弓に矢をつがえた。上体を押しもじって弓を引き、追うガスパロめがけて矢を放った。矢が脇の鎧の継ぎ目に突き刺さる。意表を突いた弓撃にあわてるガスパロに、クロードは二の矢、三の矢と弦を引いた。さすがに甲冑を貫きはしないが、立て続けに矢尻をぶち込まれたガスパロが馬上で平衡を失った。

どお、とガスパロが落馬すると、クロードは馬首をめぐらして引き返した。

「さあヒグマのおっさんよ。これでめえも仕舞いだ」

獅子の俊敏さで地に降りると、クロードは湾曲刀を再び抜いた。

ガスパロはうめきながらも、脇に刺さった矢を引き抜いて長剣を構え直す。痛みのためか動きが鈍い。それでも命乞いをするつもりはないようだった。

クロードが上段から大きく斬り込む。受けたガスパロの体が揺らいだ。続けざまの斬撃が肩の鎧の隙間をえぐった。

「ガスパロ、もつてめえに勝ち目はないぞ。大人しく身代金の算段でもしやがれ」

「若造がやかましい！ おれには戦士の名誉がある。命乞いなぞ誰がするものか」

威勢がいいが長剣の冴えは比べるべくもない。クロードはさらりと刺突をかわすと、必殺の斬撃を首元に叩き込んだ。赤黒い血が噴き出す。ガスパロの長剣が右手から滑り落ちた。だがそれでもガスパロは倒れない。首の半ばまで刃をめり込ませながら、なお両手で湾曲刀を押さえてクロードに挑みかかる。

体中を血に染めたガスパロの悪鬼の形相に、一瞬クロードは気圧された。後ろに引こうとしてつまずき、ガスパロが上にのしかかる

ような格好になった。ガスパロの顔が眼前に迫る。その眼はもはや何も見ていないようだった。ただひたすらに目の前の敵にしがみつくと、戦士の本能があるだけだ。

ガスパロが何事かをうめいた。その拍子に口からも血があふれてクロードの顔に降りかかった。歯をくいしばるようにしてガスパロの口が二、三度動いた。

しかし、ガスパロの死力もそこまでだった。急激に力が抜けて、それこそ熊のようなガスパロの体がクロードを圧迫した。

なんとかガスパロの下から這い出して、クロードは大きくため息をついた。

手下の男は頭目の敗死を見て、いずこかに逃げ去つたらしい。あとには眼を見開いたまま息絶えたガスパロだけが残された。

（こいつ、もしかしたら小身騎士のなれ果てだったか）

ただの傭兵なら自分の命と戦士の名誉を秤にかけたりしないものだ。顔中にべったりとついた血糊を拭いながらクロードは思う。

騎士になりきれず傭兵に身をやつし、食うために盗賊稼業に手染める。もしかするとそれは、流浪するクロードの未来の姿であるかもしれないのだ。

クロードは従軍僧侶に習った祈りの言葉を短くつぶやいた。

見渡すと、あたりに生える草までも鮮血が飛び散って赤く濡れていた。それでも風が吹き抜けると、草原は何事もなかったかのようにさわさわと音を立てるのだった。

隊商の先導役の馬が一ついなないて止まった。

そろそろ日も暮れようとしている。赤みを帯びた光が後ろに続く雑多な商人たちの群れを照らしていた。

二頭立ての大きな馬車を持ち出してきた者もいれば、ロバの背に荷物をくくりつけた者、あるいは自らの背に大切な商品を背負った者まで、およそ五十人ほどの商人たちが先導に続いていた。槍や弩

で武装した警護役の傭兵も混じっている。

商人たちが運ぶ物もさまざまである。南部で収穫されたばかりの小麦、ライ麦、燕麦、大豆、ヒヨコ豆などの農作物、塩やみょうばん、漆といった日用品から各種の染料。なかには遠く灼熱の国から取り寄せた藍色染料やシナモンなどの香辛料といった非常に高価な商品を荷箱に入れている商人もいる。

立ち止まった先導役の男が鈴を大きく振り鳴らした。野営の合図である。

商人たちは安堵の表情で、街道脇の草原に馬や口バたちを移した。背負った荷物を下ろし、近くの小川で水を汲む。手の空いた者は焚き火の準備を始め、共同で使う天幕を張る。あわただしいながらも、一日分の働きを終えた満足感と食事にありつける幸せとで、隊商はなごやかな雰囲気包まれていた。

穏やかな夕暮れ時の情景は、突然の来訪者によって破られた。

「なんだありや？」

隊商の最後尾で枯れ木を焚きつけていた商人が立ち上がり、街道の方を眺めた。

二人の男が隊商に向かって馬をゆつくりと歩かせていた。前を進む緑色の上着を着た優しげな顔の男、これは商人だろう。だがあとに続く男の姿がやけに目を引いた。

ねずみ色の薄汚れた外套が、べつとりと血に染まっていた。短く刈り込んだ栗色の髪にもところどころに血の跡が残っている。傭兵か騎士か、いずれにしても恐るべき殺人者であることは容易に知れた。

商人たちが呆然と見守る間にも、二人の男は何事か話し合い、笑いながら近寄ってくる。隊商を襲って金品を奪う、盗賊のような輩ではないようだった。

「やあ、野営準備でお忙しいところ申し訳ありません」

優男風の商人が馬から下りて、声をかけてきた。ねずみ色の外套の物騒な男も、こちらは無言で馬を下りる。

「隊商の主様はどちらにいらつしやいますか？ わたしは行商人のロジェといます」

下馬したロジェがにこやかに言う。後ろのクロードは対照的に、不審な目でこちらつかがう商人たちと護衛の傭兵たちを非友好的ににらみ返した。

「おまえら何者だ。ナタン様に何の用だ？」

護衛兵の一人がまるで盗賊でも見つけたように大声でがなり立てた。ロジェはほほ笑みながら応じ、クロードはさらに鋭く護衛兵をにらみつけた。

「なんと、この隊商の主はかの有名な富豪のナタン氏ですか。わたしはしない行商人ですが、この隊商がトロワへ向かうと聞いて、ぜひ加えていただこうと思って、馬を飛ばして来たんですよ」

護衛兵はいかかわらず胡散臭げにロジェとその後ろの血染めのクロードを見た。

その視線が気に喰わない、とても言わんばかりにクロードが大きく伸びをすると、剣帯の金具が触れ合ってカチリと剣呑な音を響かせた。

焚き火の炎が鍋の底をさかんに撫で回していた。鍋からは白い湯気がうつすらと上がる。コレットが木製の匙をかき回すと、潰した燕麦がどろりと粥状になっていた。

「姉貴い、飯できた？」

焚き火に歩み寄るアリスの左手には、そのあたりで仕留めてきたのか野ウサギが握られていた。右手の投げナイフは獣の血で濡れたままだ。

「稽古してたらね、いきなり走って来たんだよ、こいつ。鷹にでも追われてたのかね」

アリスの得意そうな笑顔が炎に赤く照らされた。

ルイーズは焚き火の前に座ったまま、無言で羊皮紙を眺めている。

書かれた文字を数行読んでは眉間に皺を寄せて思案し、それからまた文字に目を落とす。コレットが鍋に火をかけてから、ずっと同じようなことを繰り返していた。

隣にはフラヴィがちょこんと座り込んでいた。膝を小さく抱え込み、虚ろな瞳を炎の揺らめきに向けている。クロードと棒を打ち交わしていた時の快活な笑顔はまったく影を潜めていた。たまに何かを思い出すように目を閉じてため息をつく。抱き寄せた膝頭に頬をくつつける。目を開けてため息をもう一つ。すっかり虚脱しているようだった。

「今度の仕手はアリス、あんたにやつてもらおうかと思っている」
ルイズの声にアリスの手がはたと止まる。その手の先では、捌き終えた野ウサギの肉が木の枝を串代わりにして炎で炙られていた。「もちろん相手があんたを気に入れば、の話だ。コレットがお気に入りのようだと、コレットにやつてもらおう」

「つまり、見目麗しいあたしたちが芸を披露し、気に入られた方が春を売るふりをして一気に、ってことだね」

ルイズは無言でうなずいた。

「薬を使う、っていうのは難しそう？」

鍋をかき混ぜながらコレットが言うと、ルイズは顔をしかめた。「依頼主は、『なるべく早く、確実に』というのがご所望らしい。たとえば食べ物に混ぜたとしても、死に到る量を口に入れるかどうか。護衛隊つきの隊商だからね、失敗したら面倒なことになる」

「ならやつぱり、寝ているところを短剣で一突きつてのが一番いいね。確実だし、真夜中のうちに逃げてしまえば人目にもつかないよね」

そう言うと、アリスは美味しそうに焼けた野ウサギの肉にかじりついた。

「例の隊商はあと数日もすれば南から上ってくるだろ。いつものように、芸を売るふりをして隊商に入り込むからね。話によると、ナタンとかいう奴はかなり女好きらしいから、すぐに引っかかるだろ

う」

コレットから粥の入った碗を受け取りながら、ルイーズは言った。
「フラヴィ」

突然に名を呼ばれたフラヴィが、思わず肩をすくめる。

「そう遠くない先には、あんたにも仕手をやってもらうからね。アリスやコレットの手際をよく見て勉強しておきな」

フラヴィはうつむいたままで、小さく返事をしただけだった。いっそう強く膝を抱いて、手が少しだけ震えている。

そんなフラヴィの様子を、アリスは小首を傾げながら見ていた。口に出しては何も言わない。前の村でクロードやロジェと別れてから、フラヴィはずっとこんな感じだ。遠くを眺めるようにぼんやりとして、何か問いかけても生返事ばかり。いつもなら子どもっぽい好奇心を働かせて、うるさいぐらいに賑やかなのに。押し黙ったフラヴィをアリスはじっと見つめた。

アリスにはなんとなく察しがついていた。我が身を振り返れば、甘い痛みとともに思い出すことができる。

（初恋、かな）

フラヴィはまだ子どもとはいえ、やっぱり女の子だ。そんな年頃になりつつあるのだろう。

町から町へと流れる旅芸人の女にとって、恋はつらいことの方が多い。そんなことも分からないほど子ども時分に経験する初恋は、ことのほか苦い記憶となってアリスの心の中にも残っている。

ではフラヴィの恋煩いの相手とは、と考えると、アリスには自然と湾曲刀を左手に携えたあの騎士のことが頭に浮かんだ。

クロードと言ったかな、あの男。アリスは野ウサギの肉を噛みながら、さてどうしたものかと考えを巡らせていた。

4・決闘

「旦那、クロードの旦那」

「なんだ」

「『なんだ』じゃないですよ」

隣を歩くロジエがやや非難めいた目を向けてきた。

「そのいかにも挑発的な表情はどうにかありませんか。それじゃあ隊商に喧嘩を売りに来たみたいですよ」

「そうか」

言葉少なくクロードは答えて、頬をさする。

護衛の兵に従えられた一行は、夕食をとる商人たちをすり抜けて進んだ。隊商の主ナタンとやは列の前の方にいるらしい。あちこちの焚き火からは、野菜のごった煮に入れたニンニクの強い香りや干し肉を炙る匂いが漂う。食事の商人たちが物珍しげに護衛兵に囲まれたクロードたちの様子をうかがっていた。

ふん、これじゃまるで見世物だ、とクロードはゆるめかけた頬をまたこわばらせた。目の合った商人があわててそっぽを向く。血染めの外套を着た強面が護衛の兵に連れられているのだ。事情を知らぬ商人たちには、よほどの凶状持ちに見えるに違いない。

無言でいるとますます悪相を作ってしまうそうなので、クロードはロジエに話しかけた。

「ナタン、とかいうのは有名な商人なのか？」

「ええ、南部で手広く商売されている方です。王族とも取引があつて、おそらく王国内でも十指に入るほどの大商人ですよ」

ほう、と感心した風な声を漏らしたが、クロードにはさして興味があるわけではなかった。国王か公爵、悪くとも伯爵から騎士の叙任を受けたい、という思いがクロードには強くある。いかに富豪といえども商人の私兵になるつもりは毛頭なかった。例えば、商人風情に「様」と敬称をもちいて低頭する護衛の傭兵たちのように。そ

んな生き方に自分を収めるつもりはない。

ほどなくして、ひととき大きな天幕がクロードたちの前に姿を現した。二十人ほどが余裕を持って入れるほどの大きさはあるだろう。入り口の垂れ布には金と銀で複雑な模様が刺繍されてあつて、なるほどロジエが言った分限者ぶりもうなずける。

先導していた護衛兵が訪いを入ると、すぐに垂れ布が開かれた。天幕の奥には一人の緋色の瀟洒な服を着た男が、数人の男と机を囲んで地図を広げて話し合いを行っていた。

「ナタン様」

迷わずにロジエが一歩進み出た。疑うまでもなく、あの緋色の服を着た中年の男がこの隊商の主、ナタンだ。

「初にお目にかかります、手前は行商人のロジエ。オールツクをはじめ十の町や村を巡ってわずかな富を得ています。富貴なるこの隊商の鈴の音に惹かれてやって参りました。隊商はトロワを目指すとお聞きしています。若輩なる我が身もぜひ列に加えていただきたくお願いに上がりました」

ナタンは手元の帳面を閉じるとロジエの顔を一瞥した。相手の腹の底を見透かすような鋭い視線を送ったかと思うと、すつと頬がゆるめて笑顔を形作った。

「ようこそ我が隊商へ、ロジエ殿」

にこやかに言う。まっすぐに通った鼻筋に切れ長の目、おまけにすらりとした長身だ。いかにも女たちに騒がれそうな風貌な男、クロードは内心でナタンをそう評した。そんな男が浮かべるほほ笑みは、ロジエの十倍も腹黒く見える。

ナタンはゆつくりと机を離れ、ロジエに歩み寄った。途中、ロジエの背後にいる汚れ姿のクロードに気づき、かすかに眉をひそめた。「大市では何を商うつもりかな？」

「手前はいま何の商品も持っておりません。ただ世に名高い大市をこの目で見たい、そう思っています」

「はは、わざわざトロワまで出かけて物見遊山ですか。よいご身分

だ」

あまりの言い草にロジェは一瞬、言葉を失ってしまふ。

「お引き取り願いましうか。我が隊商にそのような不遜な心を持つて参加されると、他の商人の方々に迷惑がかかる」

ナタンの侮辱にロジェは顔色を失いかけている。名のある大商人にけなされてショックも大きいようだ。

おれも大先輩の偉い騎士にけなされたら相応に落ち込むかもしれないなあ、とクロードはそつと苦笑した。らしくない。ロジェはいつも冷静で飄々とした顔をしてなきや、似合わないだろう。

「おい、おっさん」

無礼に呼ばれたナタンの目が一気に吊り上った。ロジェも驚いてクロードを振り返る。泡を食ったロジェの顔にクロードは片目をつぶって見せる。

「……もとい、ナタン殿。拙者はクロード・デュールエル、遍歴の騎士でござる。いまはロジェ殿と連れ立って旅を続けています」
クロードは意図的にナタンとロジェを同格に扱ってやった。ナタンの頬がびくりと引きつる。

「それはそれは、食いつめ者同士が仲良く旅を続けているというわけですね」

「食いつめ者の力を侮るものではありませんぞ、ナタン殿。先日もそなたらの隊商を追いかけている最中に食いつめ者の集団である傭兵隊に出会いました」

「ふん、ならば同じ食いつめ者で徒党を組んでトロワを目指せばよかるうに」

「おやおや、それではその傭兵隊も一緒にお連れすればよかったですかな？ 季節は秋、夏場に戦場で稼いだ傭兵隊も冬籠りの準備をする時期です。そやつらもご多分に漏れず冬籠りの準備、つまり盗賊仕事の真っ最中。この近くをナタンという大層金持ちが指揮する隊商が通るので、これを襲う、とこう申ししていました」

ナタンの顔がさつと青くなる。

「しかし、拙者たちはこの隊商に加わろうとしている身、これは困ったことになったと思い、やむなく討ち取った次第。この外套の返り血はその傭兵隊の頭目のものでござる。もし拙者たちが討ち取っていないければ、いまごろこの隊商は丸裸にされていたでしょうなあ」

事実としては話の順序が逆で、身に降りかかる火の粉を払ってみたら、盗賊たちは隊商も襲うつもりだったただけのことだが、心の中で舌を出しながらクロードは都合よく話を入れ換えた。

「ばかを言つな！ そんな盗賊ごとき、わが私兵の敵ではない。お主らが余計なことをせずとも、その盗賊どもは街道に首を並べただらうよ」

「ナタン殿の私兵とは、あの護衛兵たちで？」

クロードは自分たちをここへ案内した兵たちを見返す。そして鼻で笑った。

「ナタン殿には悪いが、あのようなやせ犬もどきではとうてい太刀打ちできなかったでしょうな」

「なんだと貴様！」

クロードの嘲りを聞いた護衛傭兵の一人が拳を振り上げて激高した。最初にクロードたちに横柄な誰何をした兵だ。

「鎧も持たぬ貧乏騎士が何をぬかすか。血染めの外套など着込んでハツタリを効かせおつて。剣の扱いもろくに知らぬ若造の分際で――」

「飼い犬がぎゃんぎゃんうるせえなあ」

改まった口調から一転、クロードは粗野な物言いに変えた。強い弱い話ならもうこちらの領分だ。商人の筋を通そうとしたロジェに遠慮して、礼儀を正したのもここまでだ。

「騎士が戦場の獅子なら、傭兵は狼だ。それなのにてめえらは何だ？ 商人ごときを頭に頂いて戦場にも出ないてめらは飼い犬よ。口を開けて、まだ牙が溶けずに残っているなら重畳なこった。ご主人様の前だからと張り切ってみせるのは涙を誘うけどな」

意地悪く笑うクロードに、護衛兵は完全に頭に血が上っていた。

振り上げた拳がぶるぶると震えて、いまにもクロードに掴みかかりそうだ。大商人のナタンもまた、クロードの言葉に頬を引きつらせていた。

「クロードと申したか、貴様。このナタンを相手にそのような侮辱をして、ただで帰れると思うな」

「だから言ってるじゃねえか、おれたちはあんたの隊商を盗賊から守った恩人だつて。感謝されるならともかく、恨まれる憶えはねえぜ」

「まだ言うか！ ダニエル」

ナタンは拳を机に叩きつけて、いきりたつ護衛兵の名を叫んだ。ダニエルが応じて軽く頭を下げる。

「そやつの化けの皮をはがしてやれ。殺してもかまわん」

「おうおう、商人のくせにおっかねえことぬかしやがる」

口ではそう言いながらも、クロードは妙に嬉しそうだった。腕を組んだままで不敵に笑っている。

「どうした？ まさかあれだけ大言しておいて臆病風に吹かれたわけでもあるまい」

「とんでもない。ただな、あんたらが物を売るのに代金を取るように、おれの剣も見物料がタダとはいかんなあ」

ナタンが忌々しげに舌打ちをした。

「さきほどロジェが申し出たように、隊商に加えること。それと、おれをトロワまでの護衛として雇え」

護衛と聞いて、ダニエルがまた何事かをかなり立てたが、クロードはまったく無視した。

「それが見物料だ」

「ええい！ いちいち小うるさい男だ。貴様がダニエルに勝てば、そのような話、いくらでも呑んでくれるわ」

「おっし、契約成立だ。いいなロジェ、おまえも証人だ」

傍らで立ち尽くしていたロジェの肩を音が出るほど叩いてやる。大商人ナタンを見事に自分の土俵に引きずり込んだクロードの手際

に、ロジエは芯から感じ入ってしまったようだ。

「旦那、あの、大丈夫ですか？」

「なに、心配いらねえよ。ガスパロに比べたら、チヨロい」

「言っておくがな、クロード」

ナタンが無礼な若者を睨みつけながら言う。

「ダニエルは南部で一番権威ある剣闘試合で優勝したほどの強者だ。せいぜいこの世の別れを惜しんでおくんだな」

「そいつはどうも、ご丁寧に」

慇懃無礼に応じておいて、クロードはねずみ色の外套を脱ぎ捨てた。

かがり火が惜しげもなく焚かれた。野営地の真ん中、すでに張り終えていた商人たちの天幕はナタンの号令一下、すぐさまに片付けられて、簡易の決闘場が作られた。周りを囲うかがり火の炎が、敗者を決して逃さない壁のように見える。

さらにその外側には、面白そうな余興が始まったとばかりに商人たちが思い思いに勝負を観戦する構えだ。なかにはブドウ酒を片手に、ダニエルの剣技は到底目で追える速さじゃないだの、あの変な反りのある剣の兄ちゃんが目付きは只者じゃないだの、下馬評作りにやつきになっていた。

地平に沈んだ太陽の残光がクロードを照らす。騒がしい周囲の風景を眺めながら、クロードはいつもと変わったふうでもなく立ち尽くしていた。剣帯に落とし差しにしていた湾曲刀は、鞘ごと抜かれて左手に提げられている。かがり火の炎の向こうに心配顔のロジエを見つけると、軽く右手を挙げてやった。

一方、ダニエルはというとすでに長剣の鞘を払い、己の剣技の牙えを確かめるように何度も素振りを繰り返している。

これから殺し合いをしようというのに、自分の太刀筋を惜しげもなく披露するとは。クロードが呆れたように口元を歪めた。剣闘で

たいした成績だったらしいが、いまだに試合の気分が抜けないのか、あるいは手の込んだ罠のつもりだろうか。

「ダニエル！ 分かっているだろうな。あやつを叩きのめして、わしの前にひざまずかせろ」

長剣を掲げたダニエルが「は！」と元気よく応じる。飼い主に励まされてよほど嬉しいのか、さらに気迫を込めて剣を振るった。

なるほどまあ、いっぱしの剣士ではあるらしい。クロードの目はダニエルをそう評した。武芸自慢でもあるのだろう。長剣もよく鍛えられた業物で、突っつかれたらなかなか痛そうだ。

「始めるぞ、両者とも中央へ！」

ややヒステリックなナタンの叫び声で、二人は互いに向き合った。半身に構えたダニエルの剣の切っ先が、ぴたりとへ据えられる。

「どうしたクロード、抜かないのか」

湾曲刀は鞘に収められたまま、クロードの左手にある。

「飼い犬の相手ならば鞘の内にて十分」

「なんだと！」

「いやいや、それは冗談だ。これはおれの流儀みたいなものでな。ま、気にするな」

少し首を傾げて、小馬鹿にするようにクロードは笑った。

「はじめえ！」

ナタンの声。それに合わせて誰が用意したのか、空にした鍋が客寄せの鉦よろしく打ち鳴らされた。

安っぽいな。この場合、この相手も。

風を割ったダニエルの突きを寸で外しながら、クロードはうんざりしていた。続けざまに襲いかかる長剣の切っ先を右に左にとかわす。憤りながらも、ダニエルは慎重な男らしい。決して深くは踏み込まず、相手の出方をうかがうように小さな刺突を繰り返す。クロードは涼しい顔をしてその全てをかわした。

途端にダニエルは足運びのリズムを変えて大きく一步を踏み込んだ。

尋常ではない速さにクロードは目を見張った。あつという間にダニエルの体が近づく。その腕から繰り出された突きはクロードの予測を上回っていた。炎を反射した橙色の閃きがクロードの心臓目がけて伸びてくる。体を後ろに投げ出すようにしてやりすごす。なんとか体勢を立て直すと、クロードのチュニツクには三つの穴が小さく開いていた。

観客となった商人たちからどよめきとも歓声ともつかぬ声が波のようにさざめいた。ロジエは口元に手を当てて、声もなく勝負の行方を見守っている。

なるほどな、とクロードは心の中で何かが腑に落ちた。剣闘大会での優勝者。稲妻のような三連突きなどという派手な技をもつ剣士。いかにも奢侈品を好む金持ち商人が欲しがりそうな護衛だ。

「どうだクロードとやら、ダニエルの突きが見えたか？」

炎の輪の外でナタンが満足そうに頬をなでる。

「速いなあ、確かに。戦場を飛び交う弩の回転矢といい勝負だ」

クロードが手の甲で軽く額の汗を拭う。目はダニエルの手と足の動きを追ったままだ。

「ちよつとばかり驚いたが、それだけだ」

「減らず口を」

猛々しくダニエルが斬り込む、突き、払う。クロードは退がりながらかわす。それでもなお、湾曲刀の柄に右手をかけない。激しく体を動かしながら、クロードは軽く笑んでいた。

月に白く照らされたフラヴィの姿がふと頭に浮かんだのだ。あの時、彼女は夢中になって棒を手にクロードに打ち込んできた。フラヴィの放った一撃は剣気——受けるクロードの命に届くようななものか、を帯びていて驚いたものだった。

翻って、このダニエルの剣技はどうだ。速いし、鋭い。だが命に届くとまではクロードには感じられない。勝った負けたを常とする剣闘試合の臭いがふんぷんと漂っている。負けがすぐに死につながる戦場の剣とはまるで違う。

長剣の切っ先がクロードの頬をかすめた。物見高い商人たちからまた歓声があがる。

「クロード、まだ剣を抜かないのか」

押し気味に勝負をすすめるダニエルが嘲るように言った。

クロードの胸に腹に顔面に、雷雨のようにダニエルの突きが降りかかった。稲光のように白刃が瞬くと、チュニツクに一つ二つと穴が開き血が滲んだ。

「ったく、チクチクチクチクとお裁縫じゃあるまいし」

つぶやいたクロードが右手を湾曲刀の柄に添えた。抜刀する体勢のままダニエルを静かに見据える。

かがり火にくべられた薪が小さな音を立てて爆ぜた。細かい火の粉が宙に飛び、消えてなくなった。

じり、と間合いを詰めたのはクロードだった。ダニエルは警戒するように長剣を構えたまま動かない。ようやく気づいたのだろっ、クロードがまだ一度も太刀筋を見せていないことに。このあたりでは珍しい湾曲刀が鞘から飛び出したとき、どんな軌跡を描くか予測できないことに。

クロードがさらに半歩間合いを詰める。上体を少し前に倒して身を屈め、左脇に湾曲刀を隠すようにしてにじり寄る。

ダニエルの左足がじわりと退きかけた。おそらくダニエルには、一足一刀で鞘走らせる湾曲刀がどこまで届くのか、まったく読めていない。突き出していたはずの長剣も手元に戻し、守りを重んじた構えに変わっている。

「どうしたダニエル、何をビビってるんだ」

「そんな腰抜け騎士、やっちまえ」

急に静まった勝負の行方に、炎の輪の外から口汚く野次が飛ぶ。その声に押されてか、ダニエルが長剣を握り直して切っ先を再びクロードに向けた。

観客の声に動きを左右されてしまうのも、いかにも試合上がりの剣士らしい。闘いの趨勢を手中に収めつつあること感じつつ、クロ

ードはさらに寄る。

一步踏み込んだところで、大きく気合の声をあげた。いまから攻めるぞ、といわんばかりの叫び声にダニエルは反射的に突きを放った。雑で力の薄い、怯えたような剣をクロードは見逃さなかった。猫科の猛獣を思わせる速さで一氣にダニエルの懷まで飛び込む。湾曲刀の鞘で長剣の根元を打ち払う。同時に右手が湾曲刀の柄から離れた。

見守る誰もが、あつと声を漏らした。

長剣を湾曲刀の鞘で押さえ込まれたダニエルの首元に、抜き身の短剣が押し当てられていたのだ。してやったりと短剣を握ったクロードが笑った。

ダニエルの意識を湾曲刀の遠い間合いに逸らせておいて、一氣に近づいて懷の短剣を突き出す。長剣同士の勝負しかない剣闘試合あがりを仕止めるには格好のやり方だった。

「てめえ、そんな腕だとガスパロのおっさんにぶつ斬りにされてたぜ」

「ひ、卑怯な」

「卑怯もへつたくれもあるか。命のやり取りをする戦さ場ならどんな武器が飛び出してきたもおかしくないんだ。それとも何か、てめえは試合でもしてるつもりだったのか？」

へたりこんだダニエルに、吐き捨てるようにクロードは言う。

どつと声があがる。かがり火の炎が商人たちの大きな歓声に揺らいだ。商人たちがクロードの勝利を称える声に、拍手の音が交じり合った。よく注意して見ると、渋い顔で商人仲間に銀貨を渡す者、ほくほく顔で受け取る者もいた。いまの勝負を賭け試合にしていたらしい。賭けの倍率などクロードは知りたくもなかったが。

「よう、ナタン。これで文句はないだろう。約束は守ってもらうぞ」

「ふん、勝手にせい」

ナタンは怒り顔を隠すように、そうそうに天幕に帰っていった。本当なら追いかけていって、護衛の報酬をなるべくふんだくるべく

交渉するところだが、クロードはいささかうんざりしていた。なにによりこの闘いには真剣さがなかった。取り巻く観客はもとより、ダニエルですら生死を分かつ覚悟があったのかどうか。一人真摯だったのはかがり火の外で手を組んでクロードの勝利を祈っていたロジェくらいなものだ。

「旦那、旦那あ、ケガはありませんか」

「おう、チクチクやられて、少し血が出たくらいだ」

「旦那にもしものことがあったらと、わたしは気が気じゃありませんでしたよ」

「へっ、言つたら、チヨロいつて。試合しか知らないの剣士なんてあの程度のもんさ」

駆け寄ったロジェの肩を力強く叩いてやりながらクロードは笑う。ロジェが喜ぶのなら、そう悪いことはなかったかなと思ひ直した。だが、ナタンの護衛なんぞはクソ食らえだ。せいぜいただ飯だけは食わしてもらおうか。

クロードは一つ伸びをして、ついに抜かれることのなかった湾曲刀を剣帯に戻した。

5・宴

硬く晴れ上がった空の下に、隊商の鈴の音が清らかに響く。澄んだ音色は街道を行き交う人々に隊商の存在を知らせるとともに、風雨や病、事故を呼び寄せる悪霊を祓うものだ。

隊商の歩みは概してゆつくりとしたものだった。参加する商人のなかには徒歩で荷を担いだ者もいるし、小型の馬車にこれでもかと荷物を詰め込んだ者もいる。クロード一人で歩き旅をしていた時の方がずいぶんと速く進んだろう。

馬の歩みに揺られながら、クロードはぼんやりとそんなことを考えた。別に不満があるわけではない。どこかの戦場からお呼びがかかっているわけでもなく、のんびりとした旅路にはふさわしい。もしかしたらそれも、うらぶれた騎士の自嘲なのかもしれないが。

秋の日差しが暖かく降り注いでいる。街道をさわやかに風が横切つて、クロードの外套を涼やかにはためかせた。ダニエルとの決闘のあとに血染めの汚れは丁寧に落として、もとの冴えないねずみ色に戻っている。

ロジエは数日のうちに隊商の雰囲気になじみ、馬の手綱を引きながら徒歩の商人と肩を並べて語り合っている。北部では羊の病が流行の兆しを見せていて羊毛の値段が上がりそうだとか、今度の大都市の監督官は物欲で肥え太った中年男で「手数料」をかなり取られそうだとか、クロードにはあまり関心がない情報交換に熱を上げていた。

一方でクロードといえば、一応隊商の護衛に雇われたものの護衛隊には加わらず、ぶらぶらと隊商を見回っている。そのくせ飯だけはしっかり要求して、ただ飯より美味しいものはないといわんばかりに食べる。護衛というよりも食客だ、とクロードは考えていた。何か事があればいつでも剣を取るが、呼ばれるまではふて寝を決め込むつもりだ。

あまり商人たちとも交わらないものだから、クロードは隊商の中で完全に浮いていた。隊商主のナタンに逆らい、護衛隊長のダニエルを力ずくで黙らせた豪腕の騎士が、物も言わずに不機嫌そうな顔で馬を歩かせているのだから、無理もないことではあった。

「旦那」

馬を引いて歩くロジェに呼ばれて、クロードはしまりのない顔を向けた。

「ずいぶんと退屈そうですね。やはり戦さの臭いでもしないと、心が奮い立ちませんか？」

「そうでもないさ」

言いつつ、あくびを噛み殺す。

「さして働かずとも飯が出てくるなんて悪くねえよ」

「そうですか？ わたしから見ると旦那はなにやら不貞腐れてるように見えますが」

クロードが馬上で鼻を鳴らした。この男はよくクロードの心を読む。読んだ上でそれを包み隠さず言葉にするのだ。だが不思議と不快さはない。護衛の兵たちのように敵意を向けつつも声に出して何も言わないとか、隊商の商人たちのように周囲でひそひそと噂しながらも本人の前では何も言わないとか、そういった連中に比べたらはるかに付き合いやすい男だった。

ダニエルもあれからクロードと顔を会わさないように逃げ回っているようだ。あれだけの剣技を持つ男なのだから、戦場での戦い方を覚えればすぐにでも名声を馳せる戦士になりそうなもののに。商人に雇われた兵として一生を終えるつもりなのだろうか。

「まったく、なにをやっているのやら」

半分以上は自分自身に向けられたつぶやきは、すぐに風に溶けてしまった。

風はいつしかゆるやかに正面から吹いていた。その風の中に異音が混じったのをクロードは聞き分けた。

弩の弦を鳴らすような音だ。盗賊団の襲撃か、とクロードの体に

緊張が走る。だが、回転矢が風を切る音は聞こえてこなかった。

また弦の音がした。金属ばねを使った弩の弦よりも、ずいぶんと湿った柔らかい音だ。そのうちにクロードはその音が一定の旋律を持つて響いていることに気がついた。緊張が一気に解けると、クロードは馬の腹を蹴った。弦の音は風に乗って列の前のあたりから聞こえてくる。

隊商の前の方から大きな歓声があがった。

「さあさあ旅の商人のお方々、道中のお供に美しい弦楽の調べと艶やかな歌声、それに舞姫の華麗な踊りはどうだい？ 退屈な旅路も華やかに彩ってみせるよ。隊商主様にお目通り願いたいね」

隊商の行く手をふさぐように街道で楽器を鳴らしていたのは、例の旅芸人の一座だった。

「あれ？ その馬上のお方、クロードの旦那じゃないか」

まさにルイズだった。アリスが隊商の商人を誘うように弦楽を奏で、コレットは楽しそうに笛を吹き鳴らしていた。

フラヴィは――クロードの姿を認めた彼女は、つかの間踊るのも忘れて、大きく目を見開いていた。

「ちょっと時間いい？」

夕暮れが近づいて野営の準備を始めた頃、クロードはアリスに呼び止められた。

ルイズたち旅芸人の一座は、ナタンからあっさりと帯同を認められていた。ロジェが無下に断られたのとは大きな違いで、三人娘の容色に相好を崩すナタンの顔が目には浮かぶようだ。

アリスは地面に胡坐をかきながら、真剣な表情で楽器の弦を張り替えていた。クロードが近づくと、「そこに座って」でも言うように上目遣いの視線を送ってきた。

「なんだよ」

言いつつアリスの隣に腰を下ろす。呼んだくせにアリスは口を開

かず、弦を一つ張ってはポロンと鳴らして調子確かめていた。

野営の準備が終わると、ナタンの天幕で宴が開かれるようだった。その宴で一座は芸を披露するらしい。ルーズもコレットもフラヴィも、それぞれに忙しく準備していた。

「『小さな女羊飼』の歌、どう思う？」

不意にアリスが口を開いた。ちらりとクロードをうかがうと、すぐ次の弦に取りかかっている。

「どうって、コレットはいい歌声をしてると思う。あれならこの商人たちだって魅了できるだろう」

「違う違う、別にクロードさんに出し物の相談をしてるわけじゃないんだ。歌の中身、お話の内容のことだよ。好き？ 嫌い？」

と言われても、とクロードは考え込んでしまう。アリスがクロードに何を求めているのか、さっぱり分からなかった。

「あたしは嫌いなんだ、あの歌。女羊飼いと騎士はどんなに思い合っても結ばれない、ってまるであたしら流民に言い聞かせてるような感じでさ。『流民は所詮流民、下手な夢を見るんじゃないぞ』ってね。でもお母さんは好きなんだよね、やっぱり年の差かな」

アリスは皮肉っぽく笑った。細身で少年のように見えるアリスも年頃の女だ。道ならぬ恋の一つや二つ、しているのかもしれない。その経験が苦い表情に表れてくるのだろうか。

「おれも好きではないが、あの歌は真実を含んでいると思う。女羊飼いと騎士が結ばれようとするなら、騎士が剣を捨てて羊飼いになるか、女羊飼いが夫とともに武家を守る騎士夫人になるしかない。でも人が生き方を変えるのは並大抵のことではないからな」

特に騎士という人種はそうだ、とクロードは思う。一剣に賭ける夢、それがどんなに険しいものであっても、剣を捨て去ることなどではしないのだ。夢に破れた騎士は仕官を諦めて傭兵となり、さらには食べていくために盗賊となる。それでも腰に帯びた剣を手放すことはない。

弦を握りながら、アリスがふふんと鼻を鳴らした。

「なかなか良い事言うね、クロードさん」

周囲では自分の天幕を張り終わった商人たちが次々とナタンの天幕へと向かっていた。

「実はさ、前の町でクロードさんたちと別れてから、フラヴィがずつと塞ぎこんでね。食欲もないし、いつもみたいに笑わない。旅の途中もずつと遠くのほうを見てぼんやりしちゃってさ」

「フラヴィが？」

クロードはフラヴィと再会してから、ろくに挨拶も交わせていなかった。一座はナタンへの挨拶から帯同の願い出、それから隊商の各商人への挨拶と忙しく動き回っていて、じっくり話をしたのもアリスが最初だった。

「そう。あたしも心配でね。それでさ、あたしの予想ではあの子、恋わずらいじゃないかと思うんだ」

「恋わずらい？　だってフラヴィはまだ幼い子どもだろう。恋に熱を上げるには早すぎるんじゃないか？」

聞いたアリスが目を鋭く光らせた。

「クロードさん、そのこと誰にも言わないでよ。あの子はあたしら一座の看板娘なんだ。それが年端もいかない子どもと分かったら、客が寄りつかなくなっちゃう」

声をひそめてそう言うってから、アリスは小さくため息をついた。

「あの子は確かにまだ子どもだけど、女なんだ。男に恋焦がれる気持ちは敏感なんだよ。あの子が叶うはずのない思いに胸を塗りつぶしているかと思うと、気が気じゃなくってさ」

最後の弦を張り終えたアリスが顔を上げて、クロードに意味ありげにほほ笑んだ。

「だからさ、クロードさんからフラヴィに言い聞かせてあげよ。身分違いの恋は叶わないものなんだ、ってさ」

「待てよ、なんでおれがそんなことを」

「だって、クロードさんには妙に懐いているみたいだからね。前の町で別れてからも、よくクロードさんの事を話題に出してたし。き

つと『父親』みたいに慕ってるんだって。もし娘が危ない道に迷い込んでしまいそうだったら、助言してやるのが父親の務めだろ」

「何を勝手なことを言ってるんだ。だいたい、おれの口からそんなことが言えるか」

クロードの頭の中に無邪気に笑うフラヴィの顔が浮かぶ。

「なんでよ？ まさかクロードさん、あの子を『小さな女羊飼』に見立ててるわけじゃないんでしょ」

「なにをバカなことを……」

反射的に否定しながらも、クロードの声は尻すばみに消えていった。

否定の言葉を引き出したアリスが全ての弦を一息にかき鳴らす。そして満足そうに目を細めて笑うと、立ち上がってクロードの肩を叩いた。

「じゃ、決まりだね。頼んだよ、大将」

そう言うとなタンの天幕へとさっさと歩き出した。

一人残されたクロードは不機嫌にアリスの背中を見送った。

「言えるかよ、そんなこと」

視線を落としてつぶやいた。確かにクロードは年頃の娘を装ったフラヴィの美しさに心惹かれていた。だがフラヴィの正体を知って、胸の中を転がっていた感情はきれいに消し飛んだ、そう思っていた。それでもクロードの頭の中に、黄金の髪を背に流して朝日に照らされた悲しげなフラヴィの姿が確かに残っている。そのことに改めて気づき、クロードは顎に手をやって静かに驚いていた。

天幕の中では、もうすぐ宴が始まる。

暗がりの中で炎が揺らめいた。赤く踊る火の衣がひらひらとクロードを照らす。まるでフラヴィの舞踏衣装だ、と思いつつクロードは小枝を折って焚き火に放り込んだ。枝はたちまち炎の舌に巻かれて、踊りもさらに激しさを増す。

天幕では宴が始まっているようだ。少し離れたこの場所にも、アリスが奏でているのである。う弦楽の音がわずかに流れ、くる。近くの草むらから聞こえる秋の虫の声と研を競っているようで、少し笑えた。

背後で足音が聞こえた。クロードは振り返りもせず、火の動きに魅入っていた。どうせ誰かはすぐに知れる。この隊商の中で親しげに足音を立てながら近づいて来るのは一人だけだ。

「旦那は宴には出ないの？」

予想通りの声が脇から聞こえた。答えを待つことなく、ロジエはクロードの隣に座り込む。

「呼ばれてもないのに無理矢理押しかけて、好きでもない連中と酒を飲む気にはならん」

「とか言いつつ、本当はあの踊り子に好奇の目が向けられるのを見てられないんですよ」

クロードは低く笑った。

「さあさあ、カッコつけてないで。宴席から酒と食い物をかつぱらってきましたから、一杯やりましょうよ」

ブドウ酒入りの酒瓶と陶器のカップを二つ、軽く炙った羊肉やドライソーセージ、ナッツが盛られた器をロジエは手際よく並べた。

「そういうおまえは宴を抜けてきて、かまわなかったのか？」

「この隊商、ナタン氏以外はいした人物はいません。まさにナタン氏のための隊商です。ナタン氏の不興を買った塵芥の商人には座りが悪くって」

天幕から歓声が聞こえた。アリスの演奏が一段落したらしい。クロードは自分とロジエのカップに深紫の酒を注いだ。

「ありがたくいただきます」

カップを打ち鳴らし、一息にあおった。

宴の賑やかな騒ぎ声を遠く背に負って、見つめる炎は妖しく揺らめき続ける。特段に静かな夜だと、クロードは感じた。

「少し昔語りをしましょうか」

そう言つてロジエは杯を傾けた。クロードと同じ火を見つめる瞳には、いつになく真摯な光が宿っていた。

「わたしがまだ商人を始める前、教会に住み込みで働く学童だった頃のことです」

思わずクロードはロジエの横顔を見た。教会で神学を学ぶ子どもといえば、貴族が相当な富裕商人か、いずれにしても家門は限られる。そういった子弟はいずれは聖堂参事会員や司教あるいは大学の教授といった、いわゆるエリートを進む。細々と蜂蜜を売り歩く今のロジエとはまったく結びつかない話だ。ロジエは別に昔を懐かしむふうでもなく、ただ燃える薪を眺めていた。

「その教会の司教様は親切な方でしてね。読み書きはもちろんのこと、書庫に蓄えてある書物を惜しげもなくわたしに読ませてくれました。東西の産物に関する知識も大方はその頃に読んだ本のおかげなんです。ラテン語も少しは話せます。驚きましたか？」

「ああ……驚いた。ただの商人にしては目端が利くと思っていたが、ではおまえは貴族なのか？」

「出自の事はどうでもいいことです、いまのわたしはしがない行商人ですから。その頃、わたしには愛してやまない女性がいたんです。上等な蜂蜜のような金髪に抜けるように白く滑らかな肌、ほっそりとした顔には才知と活力を感じさせる青く大きな瞳。甘く誘う声は匂い立つ百合の花のよう。ええ、いまでも瞼を閉じると彼女の姿がはつきりと浮かんできますよ。是が非でも彼女を自分のものにしたかった」

ゆっくりと瞳を開いたロジエがブドウ酒を一口飲む。吐き出した熱い吐息には、未練とも後悔ともつかぬ感情が渦を巻いているようだった。

「娼婦だったんですよ、彼女」

天幕の方からはまた弦楽の響きがかすかに聞こえてくる。うつすらと流れる歌声はコレットのものだろうか。歌詞までは聞き取れない。

「金も無い、権力も無い当時のわたしが、どうすれば彼女を自分だけのものにできるか。わたしもその頃はよほど頭が悪かったんでしょね、行き着いちゃいけない答えに行き着いてしまったんです」

ロジェの声に震えが混じった。

「気がつくと彼女は冷たい土の路地に首から血を撒き散らして倒れていました。教会から持ち出した祭事用の銀の短剣が、わたしの右手で血に染まってました」

夜気を含んだ風が焚き火を鮮やかに躍らせた。

「わたしは教会から逃げ出しました。名前も出自も全部投げ捨てて、町を渡り歩くうちになぜか商人になっていたんですよ」

言葉を切ったロジェは焚き火の向こう、遙か彼方を見ているようだった。

天幕の方からは、さかんな拍手と歓声が聞こえた。男たちが佳い女をほめそやすような熱のこもった声。フラヴィの舞踏が始まったのだろうか。この前と同じ真紅の衣装に身を包み、揺らめく炎のように妖艶にステップを刻む。聞こえるはずのないフラヴィの靴音までが、音高くクロードの頭の中に響いてくるようだった。

踊るフラヴィを見つめる好色そうな男たちの瞳。その一人一人にフラヴィは笑みを形作って応えるのだろう。それが、旅芸人の舞踏女フラヴィの生き方だから。

もし貧乏騎士の自分と旅芸人の舞踏女フラヴィの生き方が、そのままぶつかり合ったとしたら。ロジェの話のように、無残な結末を迎えてしまうのだろうか。

揺れ動く炎をにらみつけたまま、クロードは手のひらを握り締めた。ふと気がつけば、隣のロジェが笑いをこらえるような顔でクロードを見ていた。

「驚きましたか？　いまの話はわたしが五分くらいで思いついた与太話です」

「なに？」

悪戯っぽく笑うロジェに、クロードは言葉を失くした。

「多少は真実も混じってはいますが、酒の上の笑い話ですよ」

「冗談にしては、すこし湿っぽすぎるんじゃないか」

「どうも旦那がああ踊り子にご執心のようなのですから、心ばかりの忠告をと思ひまして。娼婦に思いを寄せても得るものはありませんよ。国王が『戦陣の娼婦を独り占めすることを禁ずる』なんて勅令を出したのをご存知でしょう」

フラヴィを娼婦と決めつけたロジェの言い方に、クロードはつい頭に血が上った。

「あの子は娼婦じゃない！ フラヴィはまだ迷ってるんだ、自分の進む道がなんなのか……」

クロードの怒鳴り声はそのうちにつぶやくような声に変わってしまった。空に近くなったクロードのカップに、ロジェがブドウ酒を注ぎ込む。

西の空に高く、月が昇っていた。

6・血染め

たくさんの笑いが混じった話し声とともに騒がしい足音が聞こえてきた。ようやく宴が終わったらしい。商人たちはそれぞれの天幕へ向かいつつも、仲の良い者同士でさらに飲み直そうと、酒瓶片手に意気込んでいる者もいた。

クロードが振り返ると、ちょうど商人たちの後からアリスが天幕をくぐって出てきた。クロードたちに気がつく、親しげに手を挙げて駆け寄ってきた。

「なにこんなところでしかた飲み方してるんだよ、二人とも宴に入ってくれば良かったのに」

うつすらと化粧をほどこした顔が軽く上気して、アリスは沸き立つように上機嫌だった。

「盛り上がったんだよ。姉貴の歌もばっちり決まってたし、あたしの演奏もすごく調子良かったし。あ、なんならいまここで一曲弾いてあげようか？ お代は、なんて固いこと言わないからさ」

酒も多少入っているのか、アリスは宴の雰囲気そのままとっているかのように饒舌にまくし立てる。なぜかフラヴィの踊りの事を口に出さないのを不審に思ったが、クロードは何も言わなかった。その時だ。

アリスの肩越しに見えたものに、クロードは驚愕した。

ちょうど天幕の扉布を開いて三人が続けて出てきた。一人はルイズ。愛想笑いを浮かべながら、しきりに後ろの人物に気を使っている。続いたのはナタンだ。したたかに酔った赤い顔でニタニタと嬉しげにルイズ相手に何事か話している。

そして、ナタンに肩を抱かれた舞踏衣装のフラヴィがいた。

フラヴィは戸惑いながらもなんとか笑顔を作っていた。まるで自分の運命を諦観するように。抱き寄せられるままに、ナタンとともに歩いていく。向かう先は、小ぶりの寝所用の天幕だ。

「ちょっと！ クロードさん！」

顔色を失って立ち上がったクロードをアリスが制す。取り落としたカップが湿った音を立てて転がった。

クロードには目の前の事実がにわかには信じがたかった。年頃のふうを装わせてあるとはいえ、フラヴィはまだ幼さの残る少女のはずだ。それをよりにもよって、あのナタンが買おうというのか。

胸の内の激情があふれ出すように、みるみるうちにクロードの顔が歪む。そのまま歩き出そうとしたクロードを、アリスが強引に押しとどめた。

「アリス、どけ！」

「だめだ！ 行つてどうするつもりさ？ クロードさんの出る幕じゃない！」

なにを、と怒鳴りつけようとクロードが口を開く前に、アリスはクロードの手首をつかんだ。そして野营地から少し離れて人気の無い場所まで、クロードを引っ張って歩いた。

「あたしたちは女旅芸人の一座なんだ。買う金を持っている客がいて、あたしたちが売る商品を持っている。突き詰めればそれだけのことだよ」

「正気か？ フラヴィはあの通りまだ子どもだぞ。おまえらそれを食い物にするつもりか」

月の光にさらされたアリスの顔が妙に青白く見える。

「そうだよ。それがあたしらの生きる道なんだ。あのナタンとかいう男は、宴が始まった時からフラヴィに目をつけてた。あたしらにできることといえば、子どもをかうような変態野郎からせいぜい高い代金を取ることぐらいだ。そんなことはね、フラヴィだって納得ずみなんだよ！」

思いつきりかみ締めたクロードの歯がきしんで音を立てた。フラヴィが納得ずみだと？ そんなバカなことがあるものか！

朝の光を受けたフラヴィの悲しげな瞳がまざまざと脳裏に蘇る。

あの時、間違いなくフラヴィは今の生き方に疑問を抱いていたんだ。

仮にフラヴィが納得したと言うのなら、それは納得ではなくて生きるために妥協をしたただけだ。

「どけよ、アリス」

押し殺した声でクロードが言う。

「嫌だよ！ 行つてどうするつもりなのさ。フラヴィを買ったナタンを斬り殺し、売ったルイズ母さんも斬り殺して、姉貴もあたしも殺してフラヴィを引き取るつもりか？ あんたにそんな覚悟があるのかよ！」

アリスの激しい口調に、一瞬クロードはひるんだ。

「それにね、フラヴィが恋わずらいしてるって言つたけど、それはクロードさんのことなんだよ。あの子はあんたに惚れてるんだ！」

少なからずクロードは衝撃を受けた。別れの日に、ロジェ相手に冗談で言つたことを、まさかアリスの口から聞くとは思つてもみないことだった。

「そんなフラヴィがさ、別の男にかしずいているところをあんたに見られたいと思うか？ あの子のことを思うなら、頼むからそつとしておいてやってよ」

「どけ」

うめくような言葉だった。アリスの肩をゆっくりと押しのけて、クロードは歩き出す。

「クロードさん！」

クロードの視線に射すくめられたわけでもないだろうが、アリスはこれ以上クロードに取りすがらなかつた。うつむき加減で去っていくクロードの広い背中をただ見た。

「フラヴィの姿を見たら、あんた一生後悔するよ！」

アリスの放つた言葉がクロードの背中から心臓を刺し貫いた。

ふらつく頭を支えるのがやつとだった。

商人たちはそれぞれ自分の天幕に引き上げていて、野営地に人影はない。まばらに立つ天幕のいくつかからは賑やかな話し声が聞こ

えてくる。酒の強い連中が寄り集まって飲み直しているのだろう。天幕から漏れる橙色の明かりがあたりをまばらに照らす中、クロードはよろけながら歩いていった。

夢が見えない、とフラヴィは言っていた。悲壮感で瞳を揺らしながら。

無邪気に笑う、あるいは頬を赤く染めて恥らう、そういった少女らしいフラヴィの顔がまったく思い出せない。ナタンに肩を抱き寄せられて不器用に笑う彼女の姿が、クロードの頭の中で転がり回った。

自分が何をすべきなのか、容易には答が出そうにもない。胸の中ではまるで火突き棒でかき回されているかのように、痛いほどの激情が躍っている。

気がつけば、クロードの足は自然とナタンとフラヴィがいる寢所の天幕へと向かっていた。

アリスの制止の言葉が胸をよぎる。それでもクロードは天幕へと吸い寄せられるように近づいた。剣帯の金具が震えてかすかな音を立てる。それはまるで、ナタンを斬るか、と主人にうかがいをたてているように聞こえた。

扉布の重なりの隙間から灯火の明かりが漏れ出していた。足音を殺して忍び寄る。そっと中をうかがうと、右側には寝台に腰掛けて薄ら笑いを浮かべたナタン。左側に真紅の衣装を着たフラヴィが震えるようにして立っていた。

ナタンが何かを命じた。力無くうなずいたフラヴィが衣装の帯に手をかける。衣擦れの音も艶かしく、ゆっくりと帯が解かれていく。突然、帯が中空を舞った。

獲物に襲いかかる蛇のようにナタンに向かって走る。先端の銀色の輝きがナタンの頬をえぐった。帯はそのままナタンの左肩に絡まって、動きを封じる。呆け顔のナタンが我に返るよりも早く、フラヴィが動いた。右手には短剣が握られている。

一気に駆け寄ると、左手でナタンの口を塞ぎつつ短剣を首元に突

き刺した。クロードでさえ目を見張るような早業だった。突き刺した短剣を横に引くと、あたりに大量の血が飛び散った。フラヴィの真紅の衣装の上から、さらに異質な赤色が重なっていく。

フラヴィのあどけない白い横顔にも、返り血が何本もの線を描くように散っていた。

扉布越しのクロードが息を飲んだ。まだほんの子どもに見えたフラヴィが、顔色一つ変えずに男の命を奪い取った。舞踏の延長であるかのように淀みない動きで、ナタンの首をかき切ったのだ。

フラヴィの顔には何の表情も浮かんではいなかった。怒りも、悲しみも、戸惑いも、喜びも、何もない。鮮血に染まった顔はまったくの虚無だった。楽しそうに踊るフラヴィも、恥ずかしがって口に手をあてるフラヴィも、そこにはいない。殺しの技に身をゆだねる、恐ろしいほどに青白い顔があるだけだ。

ふとフラヴィの視線が動き、虚ろな目がこちらに向けられた。クロードはあわてて扉布から身を離し、口元を手で覆った。気配を殺しつつ、歩き去っていく。

たったいま自分の目で見たものが信じられない。

フラヴィがナタンを殺した。短剣で首元を一刺し、だ。ナタンは白目をむいて自らの血で赤く染まったベッドに倒れ込んだ。

少女らしい潔癖さが土壇場になって爆発したのだろうか。

クロードは夜明け前に悲しげに瞳を伏せたフラヴィを思い出す。

あの時、彼女は男の人の相手をするのは「嫌だ」とはつきり言っていた。男に春を売るといふ行為への嫌悪感が、ナタンという中年男の形を得て一気に噴き出したのだろうか。フラヴィは剣術の感性に並々ならぬものがあつた。彼女が繰り出した突きの鋭さを、いまでもクロードは悪寒とともに覚えている。目の前の無防備な男一人の命を奪うことくらいなら、フラヴィはやつてのけそうな気がした。

だとすれば、フラヴィにはどんな運命が待ち受けるのだろうか。高い金を払った客を殺してしまったのだ、まさかルイズのもとには戻れまい。そうすると十二、三歳の彼女は手元のわずかな金を持

って、逃亡するしかないのだろうか。それは、あまりにも過酷な道だとクロードには思えた。

「旦那、旦那！」

呼びかけられて、クロードの意識は初めて外に向けられた。気がつけば元の焚き火の場所で、ロジエが心配顔でこちらをのぞきこんでいた。

「どうしたんですか、顔が真っ青ですよ。それほど高くて美味しい酒でもなかったのに、飲みすぎましたか？」

自分の顔が氷でもあてられたように冷え切っているのに気がつく。頬に手をあててみると、手先もまた冷たくなっていた。まるで体中の血が流れるのを止めたようだった。頭も上手く働かず、自分が見たものをロジエにどう伝えればいいか分からない。

「ナタンが……」

「あの大商人殿がどうかしましたか？ まさか旦那、あんまり気に食わないもんだから殴り飛ばしてしまったんですか？」

「死んだ……殺されたぞ」

ロジエが「え？」と聞き返すものの、クロードはそれ以上喋らない。頭の中が混沌としていて、言葉が出てこなかった。

「死んだ、って旦那は殺されるとこを見たんですか」

これにもクロードは無言。頬に当てていた手で今度は口元を覆い、目を焚き火のあたりで泳がせていた。

どうも尋常ではない、とロジエなりに感じたのだろう、思案をするように鼻の頭を指で押さえる。

やがて導き出された答は単純で明快だった。

「旦那、逃げましょう」

今度はクロードが聞き返す番だった。ロジエの思考の流れについていけずに、呆けたようにロジエの顔を見返す。

ロジエは声をひそめた。

「いいですか旦那、隊商の主が殺されたとなれば、その後に始まるのは犯人探しです。もちろん隊商をどうするか、解散するのかそれ

とも新しい主を選出して旅を続けるのか、という話し合いも行われるでしょうが、それは犯人を見つけるか、もしくは見つからないと諦めた後です」

商人たちの多くはまだ起きて、それぞれの天幕で酒盛りの続きを行っているようだ。男たちの賑やかな笑い声が天幕越しに遠く聞こえてくる。

「そして、犯人として真つ先に疑われるのは、わたしたちのような素性の知れない流れ者です。ましてやわたしとクロードさんはナタン殿と遺恨を残してますから、まずまっさきに問い詰められるでしょう」

「だが、逃げれば自ら殺したことを認めるようなものではないか」

「こんな荒野のど真ん中で、何をのんきなことを言ってるんですか。五十人いて四十八人までがわたしたちが犯人だと決め付ければ、それは事実として通ってしまいますよ。下手をすれば報復に殺されます」

ナタンの死はまだ知られていない。少なくとも隊商の商人や護衛兵たちには。あたりには酒精の匂いとともに天幕から漏れる和やかな話し声が漂っている。

逃げるなら、今のうちか。クロードは思いを定める。

「よし、すぐに荷物をまとめて馬に乗ろう」

「いえ、馬は駄目です。厩係に気づかれます」

ロジエはあくまで冷静だ。

「それよりも街道から外れて、馬が入れない森へ逃げましょう。そうすれば追っ手も馬は使えない。たぶん、逃げ切れますよ」

クロードがうなづく。冷え切っていた手足も顔も元に戻り、頭も平静さを取り戻していた。

7・転身

落ち葉を踏み下草を分けて、クロードとロジエは走った。

月明かりも星の光も通らない森の内部は黒々とした闇がわだかまっている。猛禽の鳴き声が遠くで響いた。近くでは小動物らしい影が枝葉を揺する。見通しのきかない黒い森はひたすらに不気味だった。

もし肉食の獣にでも出くわしたら、という考えが頭をよぎったが、いまはそれどころではない。なるべく森の奥へ奥へと、二人はひたすらに駆けた。

森の中は緩やかな上り坂になっていて、このまま山の中へと続いているようだった。一気に山を越えてしまえば、追っ手の心配もなくなる。

かすかな気配に最初に気づいたのはクロードだった。

何者かが自分たちにつかず離れずで追ってくる。隊商の者たちではない。その気配は軽く小さく、人間というよりも狼かなにかに近い。

じつとこちらを見ている。

そう感じたクロードは、前を走るロジエの襟元をつかんでいきなり引き倒した。驚いて声をあげようとするロジエの口を、屈みこむようにして左手でふさぐ。抜き払った湾曲刀を右手に握り、物音だけに意識を集中する。

追ってきた気配が止まった。虫の鳴き声だけが森の底のほうで響いていて、静けさがあたりを圧した。

ロジエが目だけ動かしてクロードを見た。クロードは湾曲刀を下草に隠すように構え、暗闇の一点を凝視している。

「誰だ！」

とっさにクロードは叫んだ。

突然に、気配がわっと膨らんだ。見えない気配の主が透明な手を

伸ばし、左右から包み込むように襲ってくる。クロードにはそう感じられた。

圧倒的なまでに強い剣気だ。向けられただけで腹の底が痺れてくるような感覚に襲われる。暗闇の向こうに卓越した剣士がいるのだ。そいつは刃をこちらに向けて、斬り込む時機を狙っている。剣の心得のないロジェまでが、異様な雰囲気を感じ取って体を震わせていた。

湾曲刀を握る手が汗でじっとりと湿っているのに気がついて、クロードは小さく舌打ちした。姿を見せない敵に恐れをなすな。そう自分を叱咤して、クロードはゆっくりと立ち上がる。敵の剣気はいよいよ強くなり、もはや殺気と言っていい獰猛さを含んでいる。

剣士の殺気は収まる事がない。クロードを押し潰そうとするように硬い空気の塊が迫ってくるようだった。

——来る。

クロードが刀の柄を握り締めたその時、ふっと殺気が緩んだ。場を圧していた空気が柔らかくなり、急に引いていく。不審に思っとなお柄を握り直すクロードに、暗闇の向こうから意外な声が飛んできた。

「……クロードの旦那ですか？」

いぶかしむような中年女の声。まぎれもなくルイズのものだ。続いて暗闇から一座の面々が姿を現す。コレットにアリス、そして一番最後にフラヴィがそろりと現れた。

「ルイズさん、どうして？」

クロードはようやく肩の力を抜いた。

「ああ、やっぱりクロードの旦那だ。驚かさないでくださいよ」

ルイズは胸に手をあてて大きく息を吐いた。右手には護身用の短剣が握られていた。そうすると、さきほどの殺気はルイズが放ったのだろうか？ 女性らしい丸みを帯びた体つきとあの苛烈な気配が、クロードの頭の中では結びつかなかった。

「こんな年食った女を剣で脅すもんじゃないですよ。前を誰かが走

つてると思つたら、いきなり足音が止んで鞘走りの音が聞こえてきたもので、あたしはすっかり気が動転してしまいましたよ。山賊にでも出くわしたのかと思いました」

クロードは湾曲刀を鞘に収めた。ルイズの言う通りなら、彼女も暗闇の向こうでクロードが放った殺気に怯えていたのだろうか。今ひとつ釈然としないものを感じつつも、クロードは何も言わなかった。

「ルイズさんたちもやはり、隊商から逃げてきたのですか？」

ようやく起き上がったロジェが口を開く。

「じゃあやつぱり、旦那たちも同じなんだね」

「ええ、ナタン殿が殺された、と聞きました」

三人の女たちの後ろに立つフラヴィには、何の表情も浮かんでいない。

自分は夢でも見ていたのだろうか。クロードは自問してみる。フラヴィの血色が悪く見えるのは、ただ恐ろしい殺人のあった場所から逃げるといふ緊迫感のため。小さな体をときおり震わせている彼女が大人の男を刺し殺したなど、いまになっては信じられない。

「あたしが今後の相談のためにナタン様の天幕へ行ってみると、血まみれになって死んでたのさ。あたしは恐ろしくて恐ろしくて、誰が疑われるかって、あたしらのような今日合流したばかりの流民にまっさきに疑いの目が向けられるじゃないか。一も二もなく逃げ出したんだよ」

フラヴィは地面に視線を落とし、やはり無表情のままだった。

「わたしたちも同じです。あの隊商の中ではよそ者扱いで、疑いがかかるのは目に見えてましたからね」

そういつてロジェは皮肉っぽい顔でほほ笑んだ。

「とりあえず、先を急ぎましょう。いつ追っ手が来るか分からない」
ロジェは異様な気配の正体がルイズたちだったことにいくらか安堵しているようだった。

だがあの烈々たる殺気をその身に受けたクロードは、無邪気に安

心することはできない。あれだけの殺気を放つ剣士があの人の中にいる。そう考えると、もしかしたら背後から斬りかけられるかも、という戦士の本能に近い畏れが頭をもたげてくるのだ。

危惧しながらも、とりあえずロジェと女たちの後に続いた。枯葉を踏む乾いた音が響く。森の中は元の静寂に戻っていた。

三時間ほど歩いただろうか。上り坂はいつしか勾配のきつい斜面となり、後ろを振り返れば遠くまで見通せる。小走りに道なき道を駆け上った一行はいつしか息が切れ始めていた。山の中腹に小さな平地を見つけたところで、休憩を入れることにした。

木々の隙間から森の入り口あたりを見渡してみても、まだ追っ手がかかる様子はない。まったく見当違いの方角を探しているか、案外まだナタンの死に気づいてないのかもしれない。

一行は地面に腰を下ろし、保存のきく固いパンをかじり、水筒の水を飲んだ。

あと数時間で夜が明ける。明日もこの森を歩き詰めになるだろうから、交代で見張りをして仮眠をとりましょう、とロジェが提案した。反対する者は誰もいない。

寝首をかけられることを考えたわけではないが、クロードは最初の見張りに手を挙げた。それを見てアリスも手を挙げて、最初の見張り二人が決まった。

クロードとアリスが並んで座り、森の入り口の方へと目を光らせる。残りの四人は円くなつて横たわり、それぞれに毛布をかぶった。森の木々が少しばかり開かれていて、視界のちょうど上半分を無数の星が瞬く夜空が占めている。その下に黒々と繁る森は飲み込まれそうなほど静かだった。

「クロードさん、もっと丘の上に登ってみよう。もしかしたら街道まで見渡せるかも」

アリスがクロードを促した。斜面に突き出た岩に手をかけ、斜め

に生えた木々を足がかりにして、アリスは器用に急斜面を登った。よく見ればアリスの体つきもフラヴィと同じように引き締まっていた、身が軽い。フラヴィのように舞踏をしているわけでもないの、と思いつながらクロードは後に続いた。

登り切つてみると、丘はずいぶんと高く、街道まで見渡せた。野営をしていたあたりでは、まだぼつりと焚き火の光が見えた。商人たちの天幕もうつすらと影が見える。まだ何の騒ぎにもなっていないようだった。

「このぶんだと、追っ手がかかるのも明日の朝からだね」

期待はずれ、とでも言うようなアリスの言葉だった。それからアリスは一つ大きく伸びをする。追っ手をまるで恐れていないアリスの様子に、クロードは言いようのない違和感があった。

「ねえ、クロードさん」

軽く笑いながらアリスがクロードを見る。黒い瞳の奥に、クロードの心を見透かすような深い光があった。

「フラヴィがナタンの相手してるところ、見たんでしょ？」

何気ない言い方に、心臓が跳ね上がった。頬をひきつらせるクロードを見ながら、アリスが口元を薄く歪める。

「やっぱり見ちゃったんだ。あの子もどうもはつきりしないんだよね。『誰にも見られなかった？』って聞いても曖昧な顔で下を向いちやつてさ」

「どういうことだ？」

「クロードさん、あたし言ったよね。あの子の姿を見たら一生後悔するって」

アリスの黒々とした目が挑発するようにクロードを見つめた。

「見たんでしょ。あの子がナタンを上手に刺し殺すところ」

アリスの微笑み。耳を覆う亜麻色の短髪が揺れた。

一瞬の後、光の筋がクロードの首元に放たれた。

何が光ったのか確かめるよりも先に、クロードは体を横に泳がせた。アリスの右手から伸びた光が首元のほんのわずか左を通り過ぎ

た。

アリスがそのまま手首を捻って、光の筋を払う。クロードは背中から地面に転がるようにして、凄まじい速さで首を薙ぎ払おうとする光をかわした。一転して跳ね起きたときには、すでに湾曲刀の鞘を払っている。

「あれ、外した？ 驚いたな、初手で殺りきれなかった奴って、ちよつと記憶にないよ」

アリスの右手には、どこに隠していたのか細剣が握られていた。月の光を白く照り返し、切っ先がぴたりとクロードに向けられる。とたんにアリスの身体が大きく膨れたように見えた。強烈な殺気がアリスからほとばしり、クロードは胃のあたりがひりつくような感覚に襲われた。

クロードが静かに息を吐く。こいつだ、間違いない。暗闇の向こうからおれたち二人を殺そうと狙ったのは、アリスだ。

「森でおれたちを狙ったのは、おまえか！ なぜおれを殺そうとする？」

「なぜって、殺しの現場を見た人間を生かしておくわけないでしょ。さつきはまさかこつちの気配に気づくとは思わなかったけど。クロードさん、やっぱり相当な使い手なんだねえ。そのまま殺ろうとしたら、ルイズ母さんに止められちゃったよ」

細剣の白刃の向こう、アリスが弦楽器を爪弾くときよりも、さらに楽しげ笑っている。

「おまえら何者だ？ なぜナタンを……」

言いかけて、クロードはふと思ひ当たる。無用心にも女ばかりで旅をする四人。根無し草のような旅芸人一座という隠れ蓑。そして、今夜の凶行。

すべてのことが泡のように溶け合って、クロードの頭の中で一つの形になった。

「……暗殺者か」
アサン

「「」名答」

アリスが機嫌良さそうに、剣先で丸を描く。

「あのナタンで商人、方々で恨みを買ってるみたいだね。あたしらには、あの商人がどんなあこぎな商売してて誰の恨みを買ってるかなんて知らないけどさ。たいそうな金額で依頼が回ってきたらしいよ、ルイーズ母さんがほくほく顔だった」

アリスがすり足で音も無く近づいてくる。

「それで今日はフラヴィのめでたいデビュー戦だったってわけ。本当はあたしかコレットの姉貴が殺るはずだったんだけどね、ナタンはガキっぽいのが趣味らしくてね。ふん、宴の最中もずっとフラヴィを隣に座らせて離さなかったんだ。だから急遽、あの子に出番が回ってきたのさ」

丘の上に夜風が吹き渡った。枯れ葉が乾いた音を立てて、向かい合う二人の間を転がっていった。

「殺しは上手くできたけど、目撃者を生かしておくなんてね。あの子はよっぽどクロードさんのことが好きなんだねえ」

うらやましい、と口中でつぶやいて、アリスが動いた。

疾風となって細剣が繰り出される。真っ直ぐにクロードの顔面を狙った剣を弾く。思ったよりも軽い手応えで弾かれた細剣は、そのまま軌道を変えてクロードの足を払った。片足上げてそれをかわし、クロードが上段から湾曲刀を振り下ろす。アリスが細剣を横にかざした。

二振りの剣が音を立てて交錯した。

罅迫り合いの向こう側、嬉しげに笑うアリスの顔をクロードはにらみつけた。笑いながらも、平気で人を殺せる顔。完成された暗殺者の冷たい笑顔がそこにはあった。

悲しげなに目を伏せていたフラヴィが、初めて人を殺して表情を失くし、いずれこんな冷たい笑い方をするようになるのだろうか。そう思うとますます憎しみがこみ上げてくる。

「フラヴィに、まだ子どものあいつに、なぜ暗殺の技を教えた！」
フラヴィと打ち合った時、クロードが感じた背筋の冷たさは舞踏

の鍛錬のせいではなかった。フラヴィに叩き込まれた暗殺術のせいだ。あの踏み込みの鋭さも、今なら分かる。肩が触れ合わんばかりまで踏み込んだフラヴィ、あれは短剣を構えたときの距離感だったのだ。

「何を言ってるんだか」

涼しい顔でアリスが答える。

「あたしに拾われたのが運のツキだよ。捨て子だったあの子は、ほんとだったら路上で餓死してたはずだったんだからね」

女とは思えないほどの強い力が湾曲刀に伝わってくる。気を抜くと一気に押し切られそうさ。

「食わしてやった分は働いてもらわないと。言ったでしょ、あの子だって『納得ずみ』だって」

「納得などしているものか！」

クロードは渾身の力を込めて細剣を押し上げた。アリスの体が一瞬宙に浮く。続けざまに放った斬撃は、アリスがくるりと体を捻り、虚しく空を切った。

踊りながらフラヴィは、閉塞を感じていた。おそらくは、このまま暗殺者として生きることになる自分に対して。彼女が嫌悪を示した「男の人の相手」とは、暗殺のことだろう。欲望で顔を歪めた無防備な男に向かって、短剣を突き刺してその身を血で染める。そんな暗殺者の道から、フラヴィは逃れたかったに違いない。だからあんなに悲しそうに瞳を揺らしていたのだ。

「同情したところでどうなる、クロード！」

アリスの細い声が夜風を割った。

「あんたが言った通り、『羊飼い』と『騎士』じゃ生き方が違うんだ。あんたは自分の生き方を変えられるの？ それともフラヴィの生き方を変えるのか！」

細剣が閃いて胸をかすめる。アリスはそのまま剣を幻惑するように動かし、クロードの太腿を払った。かわしきれずに薄く皮膚が裂かれる。

速い上に、正確に防御の隙間を突いてくる。弾いたかと思えば、その動きのまま次の攻撃に移る。放つ殺気の重さだけではない、アリスは確かに傑出した剣士だ。

クロードは小さく笑って自らを嘲った。一握みの封土もなく一人の従者もない。仕官の望みも薄い孤独な自分を。そして、最後の望みである剣の腕でさえも、アリスの前に霞んでしまう。

アリスの突きが左腕を浅く斬った。夢中でクロードも湾曲刀を振り回すものの、アリスには届かない。

ナタンを刺し殺したフラヴィは、完全に表情を失っていた。あのときの彼女の瞳、あまりの虚ろさに総毛立つ思いがした。あのままフラヴィは、心を殺してながら踊り、殺しの技をふるって生きていく。

そんなフラヴィを救う力すら、おれにはないのか。

クロードが雄叫びをあげた。冷えた夜の空気をびりびりと震わせる。月さえも揺るがすかと思うほどの大声に、アリスは細剣を構え直す。

騎士としての分別を、クロードは吹き飛ばそうとした。騎士ではなく、一介の剣士ですらない。剣も持たぬ、ただの男のクロードが、フラヴィを求めている。あの青白く空虚な顔ではなく、恥ずかしそうに口元に手を当てて笑う顔や嬉しそうに笑う顔を。

クロードが前へと踏み込んだ。迎え撃つアリスの細剣を叩き落とし、下から斬り上げるように湾曲刀を振るう。アリスの服に刃先が軽く触れた。間髪入れずに振り下ろした湾曲刀を、アリスは細剣で受ける。

ふいに丘を下る方の茂みから、何者かが動く音がした。瞬間、二人の視線が中空をさまよった。

「フラヴィ！」

声に出したのはアリス。クロードは心の中でその名をつぶやいただけだった。茂みをかき分けて出てきたのは、まぎれもなくフラヴィだ。月光に照らされた金髪が静かに揺れている。表情は沈んだま

ま、気のせいかな明るいはずの金髪もくすんで見えた。

「手を出すんじゃないよ、フラヴィ。クロードはあたしが殺すんだ」
激しい言葉にフラヴィがビクリと体を震わせた。視線は力なく地面に落ち、その表情をうかがい知ることはできない。

アリスの細剣がクロードに襲いかかる。足を狙うと見せかけて胴を払い、頭を斬るふりをして喉元を突く。変幻自在のアリスの攻めを、クロードはなんとかしのいでいた。

クロードは湾曲刀の刃先をまっすぐ向けて、アリスを見据えた。実力はおそらくアリスの方が上回っている。だがそれほどの差ではない。ほんの少しのきっかけがあれば、クロードの剣はアリスに届く。

目を伏せて肩を落としたフラヴィを見た。

「フラヴィ」

穏やかに呼びかけるクロードの声に、フラヴィはびっくりして顔をあげた。

「おまえ、このまま暗殺者として生きたいか。教えてくれ、フラヴィ」

クロードはアリスの動きを注意深く警戒しながら語る。

「ロジェなら多くのことを知ってるだろうけど、おれはただの流浪の騎士。剣の腕だけが頼りの無頼の輩だ。へへ、けど夢はでっかく城持ちのご領主様だ。やたらと剣を振り回すばかりで、出世の糸口などなにも分からねえ。分からねえことだらけなんだ」

すこしきつめの夜風がフラヴィの顔を撫でつける。解かれた豊かな金髪が風になびいて燦と輝いた。

「だから、どうか教えて欲しい。おまえは今の生き方でいいのか」
「……クロード様」

「夢は、あるとき話した夢は、結局みつからなかったのか？」

「分かりません……わたし、どうしていいか」
フラヴィの声に少し湿った響きが混じる。

「暗殺術も、舞踏も、わたしの身体に染みついて。大人の男の人を

魅了して、その喉元にそつと短剣を押し込むことはできるんです。
でも……」

フラヴィの丸い頬を静かに透明な滴が伝う。

「今日みたいなことは、わたし……」

それ以上は嗚咽にまみれて、言葉にならなかった。空虚な表情を浮かべていた顔をくしゃくしゃに歪めて、フラヴィは泣いた。ナタに短剣を突き刺してからずっと押し殺してきた感情の波が、堰を切ってあふれ出てきたかのように。

「何を無駄口を叩いてるんだ！ フラヴィ、あんたの手はもう黒い血で染まってる。いまさかどうか聞いても、日陰者から抜け出すことなんてできやしないんだ」

「黙れ！」

鋭く叫ぶアリスに、クロードは突進して斬撃を放った。受けたアリスの細剣から火花が飛ぶ。そのまま三合、四合と剣戟を響かせて、二人は距離を取った。

乱れた呼吸をゆっくりと整える。大きく息を吐いた後、クロードの頭の中に一つの案が浮かんた。

（フラヴィがこの話を是とするなら、あの一座をことごとく斬り捨てても、おれはフラヴィを救う）

もし否ならば。その先をクロードは考えなかった。

「フラヴィー！」

名を叫ぶ。目はアリスの細剣をにらみつけたままだ。

「おれは騎士、クロード・デュールエル。おまえをおれの従者に貰い受けたい」

涙をたたえていたフラヴィの目が一瞬、大きく開かれる。

「わたしを、クロード様の……従者に？」

意味を図りかねたように繰り返してつぶやく。

「そうだ。おまえには非凡な剣の才能がある。おれに仕えて、一旗挙げるのを助けて欲しい。暗闇の中で剣を振るうのではなく、日の光が差す戦さ場でおれとともに戦ってくれ」

クロードが一瞬だけ視線をアリスから外してフラヴィを見る。彼女は表情を変えないまま、ただ立ち尽くしていた。

「でも、わたしは薄汚れた暗殺者です。金づくで仕事を請け負って、闇夜に人を殺す、そんな生き方の人間なんです。そんな人間が騎士様の従者だなんて……」

「清いも汚いもあるものか。戦さ場では剣技の冴えた奴、度胸のある奴、それから悪運の強い奴が生き残っていくんだ。金づくだとか、暗殺を生業にしているとか、そんなことは関係ない。……いや、言葉で繕うのはやめだ。フラヴィ」

クロードの視線がアリスから外れた。伏し目がちなフラヴィの青い瞳を強く見つめる。

「おれはおまえに隣にいて欲しいんだ。暗殺の技が染みついているなんてどうでもいい。ただおれの傍らで笑っていて欲しいんだ」

胸の中の思いを紡いだ言葉にも、フラヴィは顔を伏せたままだった。

だめか、とクロードの胸に失意が広がる。騎士と言っても名前だけのクロード、その従者など何の意味もないかもしれない。せいぜいが飢えさせずに毎日が過ごせる程度のもの。それにフラヴィには家族同然に育った旅芸人の一座がいる。目の前のアリスを始め、母親代わりのルイーズ、長女のコレット。彼女たちを裏切つてまで、クロードに従うだろうか。取り巻く闇からフラヴィを助け出す唯一の方法だとクロードは思ったものの、いざ口に出してみるとあまりにも馬鹿げた話のように思える。

あきらめかけて、湾曲刀を構え直すクロード。だが呆然としたフラヴィの内心で、緩やかに変化は起こっていた。

驚きがフラヴィの瞳の中で小さな爆発となり、ゆっくりと全身に広がっていった。泣き崩れていた頬にほんの少しの赤味が差し、歪んでいた口元が綻んでいく。

「は……い。クロード様に従います」

か細い声で、しかしはつきりとフラヴィは言った。震える体を己

の足で支えながら、フラヴィは暗闇の中から抜け出すことを選んだ。その瞳はまっすぐにクロードへ向けられていた。

クロードの瞳に強い光が灯った。

「聞いた通りだ、アリス。フラヴィはおれが貰い受けるぞ」

「ふざけるな！ そんな勝手な話が通るものか」

金切り声をあげて、アリスが猛然と斬りかかってくる。細剣を受け止めたクロードは、そのまま押し返すようにしてアリスを弾き飛ばした。

一瞬のうちに生じた隙に、クロードが斬撃を叩き込む。体勢を崩しつつもアリスは剣を立てて受けた。さらにクロードは息つく間を与えずに斬りつける。アリスが防御に手いっぱいになるのを確かめて、クロードは右手の湾曲刀を大きく振り上げた。

細剣ごと叩き折ろうとするような、手荒な一撃。だがアリスは細剣の向こうから冷静に見ていた。がら空きになったクロードの左胸を。

矢のようにアリスが踏み込み、身体を大きく伸ばして突きを放つ。目指すはクロードの厚い胸板に守られた心臓だ。

見守るフラヴィが口元を押さえて小さく悲鳴をあげた。細剣が胸骨の間を裂いて心臓を貫く、そんな幻影を見たに違いない。

クロードは小さく口元を歪める。

読み通りの動きだった。クロードは突き出された細剣に、かえって左肩をぶつけるように踏み込んだ。

火掻き棒でえぐられたような激痛が二の腕を刺し貫いた。正確に心臓を狙ったアリスの突きを、自らの二の腕で防いだのだ。だがそれだけではない。肉と骨の隙間にねじ込まれた細剣を、クロードは上腕の筋肉を締めて捕らえた。かみ締めた奥歯がぎしりと鳴る。とっさにアリスは細剣を引き抜こうとするが、びくともしない。

振り上げた湾曲刀を返して、刀の背で細剣をつかむアリスの右手首を打った。たまらずアリスは細剣を手放してしまい、にわかにバランスを失って後ろへたたらを踏む。クロードは静かに湾曲刀を突

き出して、アリスの首筋にあてた。

にやりと笑うクロードと対照的に、アリスは顔面蒼白になっていた。

「殺せ！」

「殺さん」

クロードは静かに言い放つと、当て身をくらわした。気を失って力の抜けたアリスの体を、優しく地面に横たえる。

ふっと気が抜けると、細剣が刺さったままになっている左腕が急に痛み出した。顔をしかめつつ湾曲刀を鞘に収めると、一息に細剣を引き抜いた。動脈までは傷つけていないようだ。傷口の大きさの割りに、流れる血の量は少ない。

「クロード様！」

駆け寄ったフラヴィが自らの服を引き裂いて、包帯代わりに左腕の傷口にあてがう。されるがままになりながらクロードは、そういえば誰かに傷の手当てをしてもらった経験など、ついぞなかったことに気がついた。気恥ずかしさから、手早く布を結ぶフラヴィを見ることができずに、なんとなく夜空を見上げた。無数の星が重なり合って、静謐な光を投げかけている。

「あの、クロード様」

布を結び終えたフラヴィが、クロードから身を離しておずおずと口を開く。

「天幕で見た通り、わたしは薄汚い暗殺を生業とする者です。このような者を従者にしては、クロード様の家名に傷がつくのでは……」

うつむきがちに言うフラヴィに、クロードは顔を緩めて笑う。

「言っただろう、おれはただの流浪の無頼だよ。傷がつくようになりたいそんな家名は持つちゃいない。それとも、そんな小身の騎士に仕えるのは嫌か？」

フラヴィが激しく頭を振る。

「ただクロード様を慮ってのことです。わたしは……クロード様の従者にしていただけるなら、こんなに嬉しいことはありません」

そう言つと、フラヴィはいきなりひざまずいた。クロードは包帯に手をあてたまま、何かと目を丸くする。フラヴィはそのまま何をするでもなく、顔を伏せている。

しばらく二人の間に気まずい沈黙がただよった。

「あの……」

ややあつて、ようやくフラヴィが口を開いた。

「すいません、わたし礼儀知らずなものですから。従者に取り立てていただいた時、どんな作法があるのか分からないんです」

顔を地面に向けたままで言う。恥ずかしさで声がうわずっていた。その姿を見て、クロードは何か言うよりも先に声をあげて笑ってしまった。

無知を笑われたと思つたか、顔を上げたフラヴィは真っ赤になつていて、いまにも泣き出しそうな目をしていた。

「あのなフラヴィ、従者なんていつても、おれとおまえたつた二人の主従だ。そんな堅苦しい礼儀もクソもない」

柔らかな金髪が流れるフラヴィの頭を撫でてやる。それから手を取つて、フラヴィを立たせてやつた。

「言つた通り、おれは何の力もない貧乏騎士だ。なるべく苦勞はかけないようにするが……そういうわけにもいかないだろうなあ」

「どこまでもお供します。戦さ場でも海の向こうでも。それで、あの、クロード様お願いがあるのですが」

「何だ？」

さつそく給金の話でも始まるかと思ひ、クロードは軽く身構えた。懐は、やつぱり軽いままだ。

「また、剣を教えてくださいね」

クロードの手をつかんだまま、フラヴィは野の花のように可憐に笑つた。こんなふう嬉しそうに笑うフラヴィの顔を見たのは、ずいぶん久しぶりの気がして、胸の中で固まりのようにたまっていた空気を一気に吐き出した。そして息を吸い込むと、温かいものが体中を満たした気がして、自然とほほ笑んでいた。

クロードはもう孤独の騎士ではない。たった一人の従者を得たことで、自分の世界が無限に広がったような気がした。王国の旗の下、海を越えて勇猛なアングル人でも、世に名高いジェノワの傭兵部隊でも、あるいは灼熱の地に住まう剽悍なサラセン人でも、どんな奴らとでも戦える。そんな気概が湧いて来るのだった。

「丘を下りよう。せめてルリーズさんには『挨拶』しとかないな」
はい、とフラヴィの元気良い返事を聞きながら、クロードは地面に放ったアリスの細剣を拾い上げた。白刃は自身の血に濡れて、赤く染まっていた。

手塩にかけて育てた暗殺者の卵を奪い去ろうというのだ。それほど簡単な話にはならないだろうな、と改めて細剣を眺める。左腕の傷は腱に達したらしい。手指を動かすと鋭く痛みが走った。

「ルリーズさんも剣術が達者なのか？」

急斜面を下りつつ、クロードが口を開いた。身軽なフラヴィはクロードより二、三步先で、木の枝に手をかけて大きな岩に下りたところだった。

「いえ、お母さんは短剣が少し使えるくらいです。コレット姉さんも剣の心得はまったく」

そうか、とつぶやいてクロードは安堵した。

逆上したルリーズがコレットとともに斬りかかって来る、そんな場面もたやすく想像できるのだ。それだけに、二人は剣を使えないという話は、クロードを落ち着かせた。アリスの細剣が貫通した左腕は軽傷とは言い難い。このうえルリーズとコレットまでが秀でた剣士だしたら、逃げ出すしかないな、と考えていたところだった。

足音を忍ばせて丘の中腹に戻ると、女二人もロジエも寝静まっていた。

そっとルリーズに近づく。後のフラヴィはさすがに何の物音も立てずに歩く。まるで蝶が宙を舞っているかのようなようだ。

クロードが立てたわずかな足音に気づいたか、ルイズが目覚めました。ゆつくりと頭をもたげ、クロードの姿を認めるや、幽霊でも見たかのように跳ね起きた。

「悪いな、ご希望に沿えなくて」

一座の中でも抜きん出て腕の立つアリスに不意を打たせたのだ。ルイズはさぞ枕を高くして眠っていたのだらう。驚いて言葉も出ないようだった。

右手に持ったアリスの細剣を、ルイズの前に放り投げてやった。血塗られた剣を見て、ルイズの顔色が変わる。

「あんた、アリスを殺したのか」

クロードはあえて何を言わない。アリスが死んだ、と思ってくればそれに越したことはない。

「ものは相談なんだがな、ルイズさん」

腰に落とし差しにした湾曲刀はいつでも抜ける体勢だ。その上でクロードは凄みを効かせるように低い声で言った。

「フラヴィだ。あの子を貰いたい」

「貰いたいって、あんた……」

そこでようやくルイズはクロードの後ろに従うフラヴィに気がついた。

「冗談じゃない！ この子はうちの一座の稼ぎ頭なんだ。あんたみたいな貧乏騎士にやれるわけがないじゃないか」

ルイズの大声に、隣で寝ていたコレットも目を覚ました。少し離れていたロジェも、ルイズの剣幕に驚いて飛び起きた。

「ただ、とは言わん」

クロードは懐を探り、いつぞやスリの男から上前をはねた財布を取り出した。これが今のクロードの全財産と言える。一瞬目を閉じてから、思い切ったようにルイズに手渡した。

怪訝な顔をしてルイズは財布を受け取った。しかし中を改めるなり、ルイズは怒りの形相に変わった。

「なんだい、これは！ 金貨が数枚とあとは銀貨ばかりじゃないか。

こんなはした金じゃあね、一晚だつてフラヴィを貸すことはできないよ！」

「不足か？」

「当たり前だ。まったくお話にならないね」

鼻息の荒いルイズに、クロードは眉間に皺を寄せた。できればあまり事を荒立てたくはないが、と嘆息しつつ言い放つ。

「なら、剣もくれてやる」

「ハッ！ そんな剣、いくらにもなりやしないだろ」

「違う」

「あん？」

目を細め、ルイズをにらみつける。

「おまえらの首を刎ねて、フラヴィを貰う。これならば文句はないだろう」

もちろんこれは脅しだ。フラヴィにとって育ての親、それに姉。血はつながってないとはいえ、斬り捨てるような真似はしたくはなかった。フラヴィに問えば、「クロード様の思うままに」と言うだろうが、なるべくなら穩便にフラヴィを引き取りたい。

「ふざけるんじゃないよ、この食い詰めの騎士が！ アリスを斬つたついでに、あたしとコレットも斬ろうつてのか。上等じゃないか、やれるもんならやってみやがれ！ その分じゃ、どうせフラヴィも言う事を聞かなかつたらすぐに殺してしまふんだろうが、この変態騎士野郎が」

クロードの思惑とは裏腹に、ルイズは怯むどころか腕を組んでクロードをにらみ返した。少人数とはいえ暗殺団の頭領だけあつて、肝もしっかりとすわっているらしい。

「いいかい、どうしてもフラヴィが欲しいっていうんだつたら、金貨百枚を今すぐ渡してもらおうか。どうせあんた、食い詰め者の貧乏騎士だ。そんな金を持ってやしないだろ。駄目なものは駄目なんだ、さつさとどっか行っちまいな！」

威勢良く言うと、ルイズは財布をクロードに投げ返した。

内心で天を仰いだ。こうも頑強に言い張られると、どうしようもなかった。このままフラヴィと逃げ去ることも考えた。が、フラヴィと暗殺団とは完全に手を切らせたかった。円満に、とはいかないだろうが、後々に遺恨を残すようだとフラヴィを暗殺業という闇から救ったとはいえない。

金貨百枚、か。

見たことも触ったこともないような大金だ。戦さ場で王侯クラスの奴を捕まえて、身代金でもせしめないと到底手に入りそうもない金額だった。それを今すぐに、となると……。

うつろに宙をさまよわせた視線が、向こう側で半身を起こしていたロジェとぶつかる。目が合った瞬間、ロジェはなぜだか目をそらした。

「……おい、ロジェ」

つかつかと歩み寄ると、ロジェは決まり悪そうな顔でそっぽを向いた。

「起きぬけに商売の話なんかされても困りますよ」

「まあ、そう言わずに聞けって」

不機嫌そうに言うロジェに、愛想良く笑いかける。

「どうだ、ロジェ。新しい商売を始める気はないか？ 蜂蜜の歩き売りだけじゃ埒があかない、って言ってただろ」

見え透いた話し方であることは自覚している。目を細めたロジェの視線が頬に突き刺さるようだった。

「何を始めるって言うんですか？」

「金貸しだ」

ロジェの視線がいつそう厳しさを増した。剣を向けられるのとはまた違った緊迫感が胸のあたりを刺激する。商人でも殺気を放つことがあるのだな、とクロードは初めて学んだ。

「クロードの旦那にお貸しするので？」

「そうだ」

「額面と使い道は？」

「聞いた通り、金貨百枚。フラヴィの身を一座から貰い受ける」

「ばかばかしい！」

ロジェが一喝する。

「女を得るために大金をつぎ込むなんて、どうかしてますよ。返すあてもなにもない、そのうちに首が回らなくなつて、また誰かに泣きつくのが関の山。そんなお金は貸せませんよ」

クロードが乾いた唇を舌で湿した。こいつは金貨百枚を持っている、いまのやりとりでそう確信した。持っていないならば、最初からそう言うはずだ。

「いいかロジェ、この金は騎士であるおれにとって先行投資なんだ」
頭の中を必死でこねくり回しながら話を組み立てる。

「先行投資？」

「そう、馬も鎧も騎士にとって重要だが、なによりも必要なのは優れた従者だ。戦さ場にたった一人で立つても、できることはたかが知れている。おれはそれを身をもって学んだ」

ロジェの目付きは変わらない。相変わらず怪しげなものを見るかのように、クロードに視線を注いでいる。

「おれはフラヴィを従者にすることにした。こいつまだ年端もいかない少女だが、剣の腕はある。二人で戦さ場に出れば、必ず戦功を立てられると思うんだ。だから、金貨百枚は決して女に使う金じゃない。戦さ場で稼ぐための投資なんだよ」

ロジェは目を閉じて、鼻に手をあてながらクロードの話を聞いていた。

「戦さ場で敵の大将でも生け捕りにできれば、金貨百枚なんて釣りができるほどの身代金が手に入る。ただの貴族を捕まえてもそれなりの金は手に入る。返すあてはあるんだ」

ロジェが目を開いた。いぶかしげな光はもうなく、ただまっすぐにクロードの目を見つめてくる。

「一つお聞きしましょうか」

クロードは唾を飲み込んだ。

「なぜあの踊り子を選んだのですか？ 彼女の剣の才については、わたしには分かりません。ですが従者にするなら、例えばもつと力の強い大男だとか、そういった者の方が良いと素人のわたしは思っています。それなのに旦那は彼女を選んだ。それはなぜですか？」

真贋を見抜く商人の目が心を射抜く。神妙な顔つきでクロードは答えを探した。

つまり、舞踏の鍛錬を積んで身軽なフラヴィは、剛剣を旨とする自分とは違った型の剣士であり、この二人の組み合わせが戦さ場で……。

あれこれと考えた途中で、クロードは思考を止めた。思いつくものはどれもこれも、建て前であるような気がした。ロジエはいつもクロードの心の内を読んでいた。ロジエに頭の中でひねり出したような嘘は通用しないのだ。

ならば、言うことはただ一つだ。

「おれがフラヴィを求めたからだ」

ロジエの眉が大きく歪んだ。

「それは女として、ということですか？」

「分らん。フラヴィの姿に魅せられたのは間違いない。それに、こいつの剣の才能にも惹かれた。その二つが混ざり合って、従者という答えに行き着いたんだ」

ロジエは一つうなずくと、ため息を吐いた。肩から力が抜けて、声色も少し柔らかくなる。

「旦那は正直な人ですね」

呆れたように言うと、ロジエは懷をこそそと探った。出てきたのは一枚の羊皮紙だ。

「荷馬車を買って、交易商やるための元手の一部だったんですが。旦那にお貸ししますよ」

「ありがたい！ 恩に着る」

「ええ、せいぜい重石になるくらいに着てください。たくさんの子を期待してますから」

差し出した羊皮紙を受け取ろうとクロードが手を伸ばすと、ロジエは羊皮紙を急に引つ込めた。

「どこか町に着いたら、きちんと借用書を書いてもらいますよ。それと」

ロジエが皮肉っぽく頬を歪めた。

「女にのめり込みすぎないように。人生の先輩からの忠告です」
それだけ言うと、クロードに羊皮紙を手渡した。

羊皮紙は為替に使われる証書だった。額面はちょうど金貨百枚。書面の内容を確認すると、クロードは頭に押し戴くようにして証書を受け取った。

もう一度ロジエに礼を言うと、クロードは振り向いた。

「ルリーズさん、ここに金貨百枚分の証書がある。これでフラヴィは貰い受けるぞ」

大きな舌打ちの音が響いた。商人ロジエの存在という誤算に、ルイズは忌々しげに膝を叩く。

クロードが左手に示す羊皮紙を、ルイズは火が灯りそうな目で見らみつけている。

ふと、ルイズが目を見失った。

クロードの肌が粟立つ。あきらめた、という雰囲気ではない。感情を押し殺し、肉食の獣がじっと機会をうかがうような沈黙。

瞬きする間に、ルイズは短剣を閃かせた。羊皮紙ごとクロードの首を切り裂こうと、中空に鋭く円を描く。

クロードは羊皮紙ごと体を引いて短剣に空を斬らす。右手で湾曲刀を鞘走らせて、ルイズの手に握られた短剣を跳ね飛ばした。飾り気のない短剣が月光を照り返しながら、木々の間にわだかまる闇に消えていく。

「おれはもうこれ以上譲る気はないぞ。どうしても言うのなら、貴様らすべて斬り捨てる」

湾曲刀の切っ先をルイズの喉元までせり上げる。皺の浮いた頬が無様に引きつる。コレットも腰の短剣に手をかけたまま、動くこ

とはできない。

後ろに控えたフラヴィは、白い顔をして成り行きを見守っていた。唇まで真っ青になっているものの、目はしっかりと見開いて母と姉の動きうかがっている。クロードに何かあればすぐに自分も短剣を引き抜く構えだ。いくぶん幼くあるものの、フラヴィの顔つきはもうすでに従者のそれに変わりつつあった。

フラヴィの様子を認めたルーズは、そつと息を吐いた。

「分かった、好きにしな」

うめくように言う。クロードの手から力無く証書を受け取ると、たいして興味もなさそうに額面を確認した。

落胆は大きいだろう。たった四人の暗殺団のうち、剣を使える二人を一日で一気に失ったのだ。今後の仕事にも差し障るに違いない。クロードもそこまでは心配してられない。今日からはフラヴィを抱えて、食い扶持も二人分稼がなくてはならない。もちろん金貨百枚の借用もある。クロードこそ、明日の仕事の心配をしなくてはならないのだ。それに、アリスは丘の天辺で気を失っているだけだ。一時したら下りてくるだろう。

「お母さん、いまままでお世話になりました。あの……わたしのわがママを許してください」

そう言つてフラヴィは頭を下げた。ルーズは呆然とフラヴィの姿を見ていたが、やがて口を開いた。

「騎士の従者ということは、戦さ場に出るんだろう。死ぬんじゃないよ、フラヴィ」

つとめて優しくそう言ったのは、育ての親の真情に近いだろう。それからルーズは優しくほほ笑んだ。

「コレット姉さんも、身体に気をつけて元気で」

「あんたが騎士の従者かあ」

コレットは感慨深げに言った。

「『小さな女羊飼』が騎士の従者になってしまうなんてね。あの歌には悲恋しかないけど、現実はどうでもないんだ。がんばってね、

フラヴィー」

にこやかに笑うと、コレットは手を振って別れを告げた。

東の空がうつすらと青くなりかけていた。また夜が明ける。

悲しみて瞳を揺らしていたフラヴィーは、そこにはもういなかった。いまはクロードの隣で、真っ直ぐに前を見据えて嬉しそうにほほ笑んでいた。

木の棒を握ったロジェが弾かれて、尻餅をついた。

「ロジェさん、だいじょうぶですか？」

同じく木の棒を握ったフラヴィーが、心配そうな顔で言った。それほど強く弾いてはないんだけどな、と思いつつロジェの顔をのぞき込んだ。クロードは石造りの宿屋の壁にもたれて腕を組み、中庭で繰り広げられた二人の「果し合い」を見ていた。

あれから歩き詰めて山を越えた三人は、近くの町にひとまず落ち着いた。宿屋に一室を取ってたつぷり睡眠を取り、ひさしぶりの温かい食事にありついた。もちろんロジェは宿に入ったところで、すぐに借用書を書かせた。

「痛たた……」

尻をさすりながらロジェが起き上がる。棒を持つ右手にも、かなりの痺れがきているはずだ。それほどフラヴィーの切り返しは鋭かった。見守るクロードは感心していた。

なぜこの二人が「果し合い」しているかという、きつかけは単純なことだった。フラヴィーには剣に非凡な才がある、というクロードの弁に、ロジェが疑問を挟んだのだ。初めはちょっとしたロジェの冗談だったが、「じゃあ、試して見るか？」と返したクロードの言葉によって瞬く間に話が発展し、二人は棒を持って向かい合うことになった。

ロジェはほんの少し心得があつたらしい。右手に棒を構えた姿は、

それなりにさまになっていた。しかしあくまで「それなり」であつて、打ち合うまでもなくクロードには結果が見えていた。

「どうだ？ おれの目に狂いがないことは分かつてもらえたか？」
たつた一度の打ち込みで体ごと跳ね飛ばされたロジエは、諦めたようにうなずきかへた。

秋晴れの空から明るい日差しが降り注いでいる。宿に面した通りには収穫された麦や大豆、それからリンゴや梨などの果実が山と積まれていて、秋の実りの香りを運んでいた。

「旦那はこれからどちらに向かうのですか？」

やれやれといった様子でロジエは木の棒を置いた。

「そうだな、やっぱり北部へ向かう。トロワに帰るかどうかはまだ決めてないが。ロジエはどうする？」

「もちろん、旦那について行きますよ。旦那の首には金貨百枚とその利子の借用書がぶら下がってますからね。戦さ場で稼いでもらうまでは、どこにも逃がさないですよ」

棒を持っていた右手をさすりながらロジエは言う。その顔は不敵に笑っていた。

「戦さ場にもついて来るつもりか？」

笑いながらクロードが言うと、ロジエはさも当然と言うように答えた。

「当たり前ですよ。戦争では大量の物資が動きますからね。儲け話も必ず転がっています。もし旦那が敵方の貴族でも生け捕ってきたら、手数料をいただいで身代金交渉をしますよ」

ロジエの商魂はとびきりたくましいようだった。剣と槍を打ち交わす音が響き、矢が雨のように降る戦さ場を、少しも恐れていない。目を移せば、フラヴィが木の棒を右手に素振りをしていた。豊かな金髪をいまは頭の後ろで束ねている。勢い良く踏み込むたびに髪の毛の先が跳ねて、太陽の光を明るく照り返した。

フラヴィも戦さ場を恐れる気配はまったくなく、むしろクロードとともに剣を振るうことを楽しんでいるようだった。この小さ

な従者には、戦さ場に立つ前に教えなければならないことが山とある。剣術もそうだが、戦さ場での戦い方、身の処し方、それに男装をさせたほうがいいだろう。

「クロード様」

さまざまなことに思いを巡らせていると、棒を構えたままのフラヴィに呼ばれた。

「一手、ご教授願います」

真面目きつた顔でそう言う。太陽の下で剣の稽古ができることが、嬉しくてしかたない。そんな気持ちで所作の隅々に見て取れた。

クロードがロジェの置いた木の棒を拾い上げた。右手に構えて、フラヴィと向き合う。

二本の木の棒が交錯する甲高い音が、昼下がりの町に響き渡った。

7・転身（後書き）

お読み頂きありがとうございます。

こういった非ファンタジー中世モノに需要があるようなら、また書いてみようかと思えます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0116j/>

貧乏騎士クロード

2010年10月8日14時17分発行